

第2章

受入機関関係者

研修の思い出 雑感

財団法人自動車研究所
池辺 敏充

阪神大震災、地下鉄サリン事件など、最近、安全であるはずの日本の安全神話が崩されつつある。しかし、私はそうは思わない。日本は、やはり安全な国であると信じる。

それは、研修旅行中の出来事である。ひとりの研修員が、パスポートやクレジットカードが入った財布を落としたと言い出した。たぶん、現在地点より2時間前に訪問した地方都市でのことで、落とした場所の心当たりはないと言う。だが、他の研修員曰く、「銀座」という喫茶店の前でバッグの整理をしたときではないかと思い出してくれた(この研修員、中国人女性で漢字が読めたのが幸いした)。

私は、この情報をたよりに電話案内で「銀座」を調べた。たしか3～4軒あったように記憶している。2軒目の電話に出たのは、「銀座のママ」(?)である。店には届いていないが、近くの交番の電話番号を教えてくれた。早速、その交番にTEL。応答がない。たしか1～2時間の間交番は留守だったと思う。その間、別の「銀座」にも電話したが手掛かりはなかった。もちろん、銀行など関係各所には紛失の届け出を完了した。

騒ぎ出してから3～4時間は経過していただろう。やっと、お巡りさんが電話の向こうで「あー、財布とパスポートねー、とどいてるよー」。誰かが

拾って届けてくれたと言う。

本来、外国人が遺失物を受け取る場合、身分を証明するものをしかるべき機関で発行してもらってから受け取ることができるそうだが、研修監理員のMさんの交渉により即返還となった。

もうひとつ別の話。2～3日後に帰国をひかえた研修員が、東京へ買い物に行った帰りのこと。牛久駅の歩道橋の手すりに、これまたパスポート入りの財布を置き忘れたことをTBICに戻ってから気がつき、真っ青……。しかし、これも女子高生の届け出により無事返還された。

各国の研修員が口をそろえて言う。自国だったらまず出てこないだろうと。日本でもめずらしいことかもしれないが、「どうだ日本は」と誇りに思った。

当研究所において、最先端の自動車技術、「自動車の安全・公害対策技術」を研修された方々が、それぞれの国に帰り自動車技術のみならず日本をどう評価しているかは分からないが、少なくとも研修期間をとおして、日本社会の安全を確認していただけたように思う。

地下鉄サリン事件は、目的が不明確のままであり、どう考えてもテロリズムではない。また、阪神大震災のとき、窃盗、略奪などの発生がなかったことは記憶に新しいが、このような非常時においても、われわれ日本人が潜在的にもつ正当な規律・秩序が表現されたように日本社会は大方安全であると確信した次第である。

ここ数年、研修のお手伝いをして思うことは、アジア圏の経済大国日本を彼らがどのような目で

見たのだろうか気にかかる。たぶん、日本観・日本人観、一般的にはおおむね肯定的な見方をしてくれたのだらうと思いつつ、一方では時として、ある国の国民は警戒や反発を表現しているようなニュースを聞くと複雑な感がある。

しかし、ODAや民間レベルでの経済・技術協力などの活動が、必ずや対日感情の好転、そして日本に対するプラス評価につながるのではないかと考えている。したがって、今後ともODAによる援助を続けることにより、アジアをリードする日本の位置づけがハッキリしてくるようと思われる。

最後になりましたが、15周年記念誌発刊にあたり執筆の機会をいただきましたことに感謝し、また、関係各位の今後のご発展を祈念いたしまして研修の感想とさせていただきます。

研修員とともに

家畜衛生試験場研究交流科長
石川 正志

振り返ってみると、家畜衛生試験場とJICA研修員の関係はかなり古く、昭和37(1962)年度以来のおつきあいである。確か、この研修員制度がスタートしたときの第1号が家畜衛生研究コースであったと聞いている。このコースは最終年の平成元年度までの間に毎年10名前後の研修員を受け入れ、その数は46カ国263名に達した。また、平成4年度から新しく獣医バイオ診断技術コースが始まり、現在、毎年6～7名が来場し、最新の診断技術の修得に励んでいる。さらに、このような集団コースとは別に、JICAプロジェクトなど、各種ファンドを利用して来場する、いわゆる個別研修員もかなりの数に達している。

研修員はおおむね獣医技術者であるが、その肩書を見る限りでは、若くても衛生行政指導あるいは教育研究指導を行う上級ポストについている人が多い。したがって、これらの研修事業が長年にわたり続いているのも、受入れ研究室の好意と柔軟な対応によるところがきわめて大きい。もちろん

ん一般的には真面目な研修員がほとんどであるが、困り者としては、たとえば何もこれらのコースに参加する必要性がなく高慢な態度を取る者、研修員のために通訳を頼まねばならない者、研究室での実技研修はそっちのけで資料ばかり漁る者、強度のホームシックで研修どころではない者などである。ごく少数ではあるが、これらの対応には研究室も私たちもかなりの時間を費やしたもので、今は懐かしいと言うべきか。これからはないとはいえないであろうと、覚悟しているところである。

しかし一方では、最近になって短い期間ながらも着実に実技を修得し、学会発表や論文としてまとめられるような成果を出す研修員も出てきており、従来に比して確実に研修員全体のレベルが向上していることがうかがえる。これも各研究室の努力はさることながら、このような研修制度の成果のひとつであろう。また、受入れ研究室では研修以外の交流も活発で、特にアフター5のさまざまなイベントや研修旅行は研修員にとって日本人との良き関係作りに大いに役立っている。

研修員のほとんどはTBICを利用しているわけであるが、その快適な環境にはおおむね満足しているようである。しかし同時に、多数の国内研修生を受け入れている立場から見ると、なんとも恨めしくなるような施設でもある。このような施設が国内向けにもと、つい願わずにはいられない。

いずれにしても、研修員は最新の情報と技術の修得を目的とはしながらも、各人それぞれの想いを心に秘め来日していることと思われるので、上述したような問題についてはごくささいなことと考え、今後とも彼らがよりよい雰囲気の中かで、各人の目的が達成できるよう、緑の下から支えたいと思う。

(石川氏は平成7年8月29日ご逝去されました。
ここに謹んでおくやみ申し上げます。)

研修雑感

元・物質工学工業技術研究所国際研究協力室長

山田谷 正子

筑波インターナショナルセンターが設立されて本年で15周年を迎えることは、集団研修「化学技術研究コース」に係わってきた私どもにとってきわめて感慨深いものがある。

昭和54年に首都圏に点在していた工業技術院傘下の9つの研究所が筑波研究学園都市への移転を実施した。国立研究所の集中化が、本格的に促進された時期であった。筑波への移転によって、それまでの老朽化していた研究所の建物、施設、設備等は、一挙に整備され、研究環境は著しくグレードアップしたが、一方、生活の基盤である都市機能がまだ確立されていない状態であったため、新しい都市での生活は、不安と期待に満ちたものであった。このような時期に、当地において国際協力事業団の国際研修事業が大きく展開されることになったのである。

当時の化学技術研究所の国際協力活動をふりかえてみると、メキシコや東南アジアへの専門家派遣が主体であって、海外からの研修受入れ業務はまだ少ない状態であった。1980年代に入ってJICA集団研修の受入れが開始され、その後の当所の国際協力活動は大きなインパクトを受けることになった。

集団研修「化学技術研究コース」の開始は1983年で、研修員は11人であった。当所の国際協力室では八代大六郎室長を中心に筑波インターナショナルセンターの関係者と協力して、受入れに熱心に取り組み、以後12年の長期にわたって、継続されたのである。「継続は力なり」といわれるが、その要因は、当所が、化学および化学工業に係る総合的、包括的課題に取り組んでいて広範囲のテーマに関する研修が可能であったことは言うまでもないが、つくば市全体が国際研究都市としての機能を高めてきたことも重要である。当初心配され

た日常生活面は、むしろ外国人の生活に適切な規模で整備され、多くの面で国際交流に適切な場となってきている。

研究の面では、言葉によるコミュニケーションのくいちがいが、さまざまに形をかえて生じることが問題といわれていたが、最近では、それらの多くが、基礎学力や技術のレベルがかみ合わないことから生じていることが明らかになってきた。同じ基盤を有する研究者、技術者同士は言葉が異なってもおのずと分かり合えるところがあり、そのレベルのギャップが大きいケースでは、いろいろな形で不協和音となり、両者の関係を悪化させることがあると考えられる。

研修期間が1年という長期であるため、研修員は、生活習慣や研究の進捗状況などで、悩みをもつことも多々あり、受入側でも手だてを尽くしても、必ずしも効果が上がらないこともある。しかし、後日、再度来日して日本の大学で学位を取得し、流暢な日本語を話すようになっていたなどの例は、研修時には考えられなかったほど問題が多かった研修員である。本人にとって苦しかった研修時に受けた知的刺激が、研究のステップアップに結びついていると考えられ、研修の効果を長い目で見る必要があると思われる。しかし、一般的には、問題が少なくスムーズに研修をこなすことを良しとしているので難しい。

今後、高度の技術研修と研究手法を学ぶためのキャリアをもつ人を対象としたコースが研究所側として望まれる。

15年の節目を迎えて、JICA、JICEの担当の方々には時流に即したきめ細かい対処を期待している。

JICA研修を振り返って

生命工学工業技術研究所

山岡 正和

私が「化学技術研究集団研修コース」でJICA研修員を初めて引き受けたのは1984年秋であった。その後ほとんど毎年のように研修員を引き受ける

ことになり、去年から来ているメキシコのMaria Guadalupeさんが8人目の研修員である。

この集団研修については研修員、受入側双方からさまざまな問題が指摘されている。いわく配属先の研究テーマと研修員が本当に学びたい課題が必ずしも一致しない、研修を修了しても学位がとれない、家族と一緒に暮らしながらの研修ができない、英語力が基準に達していない場合があるなど。しかし、1984年当時はSTAフェロー制度もAISTフェロー制度も何もまだない時代であり、宿の手配や身の回りの世話が不要で、研究予算もついて1年間一緒に研究する人が増えるという、引き受け側にもかなり有益な制度としての印象があったように思う。

研修員を引き受けるうえで私が心がけていることがふたつある。ひとつは当然ながら研修員との意思の疎通であり、他のひとつは意味のある研究を進めながら研修員にいかにして充足感を与えるかである。私は研修の初めに十分に話し合っ、研修員がどのような人柄なのか、何を希望しているのか、どのような研究経歴の持ち主なのかを理解し、こちらが用意した具体的な研究テーマを理解してもらい、かつ研修生活で守ってほしいことなどを伝えることにしている。研究テーマの理解にはやはり時間がかかるので、時間をおいて何度でも率直に話し合うことも大切なようだ。事前に志望が提出され、履歴書も配布されているが、やはり面談に勝るものはない。幸いなことに今までの大部分の研修員は誠実で思考が柔軟で積極的であり、意思の疎通に大きな問題が生じたことはほとんどないが、油断は禁物。通じたと思っ、いても実は通じていないこともあり、互いに慣れない外国語でのコミュニケーションの難しさをつくづくと感じることもたびたびであった。

さて、長丁場の研修生活を支えるのは何といても研修員の精神的な充実感ではなかろうか。どれだけのものを学んだか、どれだけ研究に貢献できたか、具体的に成果が挙げられたかなどがその主たる要素である。残念ながら研究成果はいつも目

に見えて挙がるものではなく、心苦しい思いも何度か経験した。昭和62年度の研修員Peesamaiさんの場合はすべてが順調に進んだ例であろう。彼女は1年の研修期間中に3本の論文をまとめ、修了式では代表で答辞を述べたのであった。Peesamaiさんはタイの名門大学卒業後、国立研究所から留学して米国大学院を修了した才媛で、「あなたのような人がまたなぜ日本に来たのか」と冗談まじりに聞いたものである。家族ぐるみでおつきあいし、以来手紙のやり取りが続いている。現在は国立研究所の研究リーダーのひとりとして活躍している。

実験室とTBICを往復するだけの日常に変化をつける意味でも工場見学や研修旅行も研修の重要な項目のひとつである。もちろん旅行の途中で見聞する日本の風物も印象深いようだが、研修員には自分の関心の深い工場の見学が勉強にもなり充足感を味わうようだ。

JICA集団研修と関わるようになって足掛け11年が経過した。「化学技術研究コース」も「物質工学」と「生命工学」の2コースに衣替えしてさらなる発展が期待されている。TBICの15周年記念誌発刊のこの機会に、私のささやかな思い出を含め、折に触れ感じたことや気のついたことを手短かにまとめた。今後の参考にさせていただければ幸いです。

研修に携わって

国土地理院
岩瀬 三夫

国土地理院が現在までに研修員を受け入れた数は、約52カ国、延べ420人になる。

私が最初に研修員に出会ったのは、昭和47年ごろで、当時は国土地理院は東京目黒の高台にあった。確か、写真測量図化の研修で、特にイランからの研修員がやたらと喋りまくる人だとの印象があった。今になって振り返れば、失礼ではあるが、やはり中東の国ならば当然かと思える。

それ以来、あれこれと研修に携わる機会があり、

およそ数十人、いや、それ以上の研修員との出会いがあったにちがいない。それぞれの思い出があるが、夏の暑い日の屋外実習では、さぞかし赤道付近からの研修員は暑さに強かろうと思えば、日本の夏は彼らをもバテさせた特異な暑さであった思い出や、冬の北海道で、初めて見る雪に歓喜の声をあげた研修員の顔を今でもはっきり覚えている。さらに、そう言えば、古い日本式旅館に泊り、寒さのため一晩中ストーブを燃やしっぱなしにしながら寝ることになり、その火の元が心配で一晩中それぞれの部屋を見回ったことなど、今にして思えば神経質ほど思い込んでいたころでもあった。

ところで、研修員の印象を大陸別に拾うと、おおよそ次のようなものであろうか。

ラテンアメリカからの研修員は、酒を飲み、陽気な性格であることは言わずと知れたことだが、要領がいいのも天下一品であろう。

アジアからの研修員は、概しておとなしくてシャイな気質で、その典型なのが日本人であることは言うまでもない。

中東からの研修員は、自分をすごく大事にしすぎる性格であるため、他人とのコンピネーションにはあまり気配りをしない。

アフリカの研修員は、真面目タイプが多く、日本人からは好まれる性格ではあるが、分からないことも分かったように振る舞う、独得の個性を持っている感がある。以上は、私の偏見の印象である。

研修の始まりは、日本文化へのカルチャーショックを受けることがあるが、それにも増してやっかいなのは、日本に慣れ過ぎて、自国に帰ってから陥る逆カルチャーショックであろう。これに対処するには、本人の努力が一番であろうが、受入側も、あまりにも必要以上の親切、丁寧な対応も考えなくてはならない。日本人は親切で、やさしくていつでも笑顔で接してくれるということが共通の印象であるが、それに加え、シビアさ、厳しさという印象もこれからの研修を通して研修員に

与えていくようにすることが、さらに研修効果を増長するひとつの要因であると思う。

これからも多くの国の研修員との出会いがあるだろうが、彼らに与えるだけの研修から彼らから得ることも重要であることを認め、ある時はシビアに、ある時はやさしく、彼らとの協力の輪を広げていければ、と夢見ている昨今である。

研修員との思い出

計量研究所計測システム部計測要素研究室主任研究官

笠原 剛

職場のJICA集団研修は今年で23年目となり、つぐば移転後は筑波インターナショナルセンター(TBIC)の事業として継続されてきました。2年前からコース名は「法定計量」となり、体制も改められました。研修内容の計量関連技術は各種産業育成のための社会基盤であり、また基準認証制度の国際的整合性を確保しようという近年の情勢に伴って、その重要性が認識されつつあります。手前味噌のようですが、開発途上国からの技術協力要請も増加しており、集団研修を含むいくつかの協力がJICAにより実施されてきました。これまでTBICに滞在した関連研修員は延べ183名で、かつて従事した技術指導と研修調整業務により、筆者はそのうち約70名と面識を得ることができました。調整業務は研修員と接する時間が技術指導現場より通常少ないのですが、TBICほかのさまざまな場所で、研修員により多くの異文化に触れることもできました。

一般的に研究は先端的領域であり、開発途上国側が真に必要なとしている技術と往々にして異なるため、研修員と指導側双方の意向に隔たりがあります。たとえば、非常に高精度な測定技術の修得を研修員が希望したとして、母国ではその技術を生かす場面がきわめて少ない可能性があります。計量分野では設定・維持・供給は重要な3要素ですが、標準の設定技術を修得したとしても、その維持・供給に問題がある場合もあります。このよ

うに集団研修では研修員と指導側双方の認識を詳細に一致させることは容易ではありません。また、つくばでは多くの研究機関とも同じように、研修のための専門組織はありません。研修員が知りたい情報は日本ではすでに形骸化した対象であるため、指導する専門家が限られる場合もあります。このため、研修事業が成立しない不安を感じたこともありました。募集要綱などで、研修内容に関する情報を提供していても、研修員の来日後でない彼らの真意を把握することは容易ではありません。

従来から先進諸国間では、計量およびその標準分野での国際的な交流の重要性が認識されており、メートル条約の締結を発端にさまざまな技術交流がありました。2カ国間だけで計量標準の国際比較などを実施することもあります。国際会議のように多国間での交流もあります。計量関連分野の国際会議には学会などの研究集会だけではなく、各国政府間での条約、協定などに基づくものもあり、計量に従事するからには少なからず関与することになります。ときどき実施される日本国内での会議はきわめて貴重な機会です。これらを傍聴することは各国の将来を担う研修員にとって大変有意義なことではないでしょうか。

筆者がTBICを初めて訪問したのはマレーシアの研修員から、質量測定に関する約1カ月ほどの個別実習グループの小さな送別会へ招待されたときで、すでに10年以上前です。当初、これらの思い出を手繰って綴るつもりでしたが、紙面の都合もあり別の機会に譲りたいと思います。ちなみに、筆者が14年前に技術指導を受け持った研修員にビルマ（現ミャンマー）の人がいました。記憶に残る最初の研修員でしたが、過去の国となってしまう、筆者においては最後のビルマ人研修員となるかもしれません。その後、ビルマ時代にカードが送付されてきたきりで、達者でいるか気になっています。

研修回想

建設省土木研究所
佐々木 隆

建設省土木研究所には、筑波インターナショナルセンターから多くの研修員が訪れます。私の場合は、「河川及びダム工学」研修（現在：「河川及びダム工学II」研修）で訪れる各国からの研修員と接することが一番多く、最初に講師を担当したのは、平成元年の研修でした。

「河川及びダム工学」研修では、集団に対する講義と個人研修に分かれています。やはり、個人研修で接した研修員が心に残ります。最初の研修で一番印象に残った研修員はイランから来られた方で、「ダムの耐震設計」に関して特に興味を持たれていました。この分野は私の専門分野でもあり、また初めての研修員だったこともあって、個人研修の際にはかなり張り切り切りました。私のつたない語学力のため、研修監理員の方のお手伝いと筆談を交えながら、毎日汗をかきかき研修を進めたことを鮮明に覚えています。

彼は、その研修を終えてから本国でダムの耐震設計に携わる予定とのことで、いわばその分野の素人だったのですが、素人だったために、私が常識として思っていた「理論」について多くの質問を投げかけてきて、それに答えるべく勉強したことが私の頭の整理にもなり、私にとっても有意義な研修となりました。彼は、私より少し年上であったかと思いますが、センターで行われた送別パーティーでは彼の小さい子供の写真を見せられて、「君に似ている」といわれたときには私はどういうように彼に見られていたのか……と思いました。

よく、別れの際には、「またいつか会いましょう」という言葉を交わしますが、彼と私の場合は、その言葉どおり再会することができました。数年後、偶然、日本のある会議場の廊下で出会ったときには、とても懐かしく、思わず日本語で話しかけてしまいました。すると、流ちょうな日本語で答え

てくれました。そういえば、彼は研修のときから日本語を覚えようとしていたなあと思い出しました。彼は本国に帰った後もさらに勉強したいという気持ちが強く残ったらしく、日本の大学への留学を果たしたそうです。もともと、日本に良い印象を持っていたこととは思いますが、また、日本に来たいと思ってくれたことで、安心しました。

個人研修では、研修員と接する時間も多く、研修員ひとりひとりの能力、希望に合わせて柔軟に研修を進めることができ、内容の濃い研修が行えると思いますが、一方、時間や設備の関係で必ずしも研修員の期待に添う内容の研修を行えないこともあります。講義では、ほぼ骨格が定まっているので、そのようなことはないのですが、問題なのは研修員の専門能力がかなり違うことだと思います。講義の内容が、ある研修員にとっては「常識」であっても、他のある研修員にとっては「初耳」であることが多くあり、演習を行うとその差が歴然と表れます。このため、演習問題を作成するときにいつも頭を悩ませています。知識がある研修員も興味をもち、かつ、難解ではないような演習を作成する、と口で言うのはやさしいですが、非常に難しいことです。今年も、この研修が始まる季節です。講義、演習に対するこれまでの研修員の反応を思い出しながら、講義、演習内容に改良を図っていきたいと思っています。

最後になりましたが、筑波インターナショナルセンター15周年おめでとうございます。センターおよび関係者の方々、各研修制度のますますのご発展を望んでおります。

集団研修にかかわって

工業技術院資源環境技術総合研究所技術相談所
山下 安正

TBIC設立15周年をお祝い申し上げますとともに、この区切りにあたり、「産業公害防止コース」のコースリーダーとして7年間担当してきたわずかな経験で感じたことを述べ、今後のJICA研修の

より一層の発展の一助になればと思い拙文を書きました。

担当したコースの主目標は、過去のわが国の経験を踏まえ、開発途上国での産業活動の活発化に伴い問題化しつつある環境破壊を最小限に食い止め、自然や人間生活を守るための、適切な環境防止技術や研究手法を教授することにあります。

特に、このコースの特徴は、研修期間のほとんどを指導研究者のもとで過ごし、帰国後それぞれの国で生じる環境問題に、適切な手法で対応することのできる能力を身につけるよう指導していることです。

これまで、アジアでは中国、フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシア、中南米からはメキシコ、ブラジル、チリ、ペルー、アルゼンティンと多くの国の方々を受け入れてきました。これらの国々の人たちは、ひとりひとり個性적입니다。アジアの人たちと中南米の人たちでは感情表現や繊細さにおいて、それぞれの地域で類似性のあること、また、太平洋戦争で大変迷惑をかけたアジアの人たちの感情は、ほとんど戦争に関係のなかった中南米の人たちに比べ、私たち日本人に対する感情が大変複雑なものであることが分かりました。そして、このような意識の違いは、受入側の私たちにもいえることで、戦争責任の問題や対外的なことがらに各人に差があるのも事実です。

このような意識や感情の違いを、お互いが理解し認め合い、交流を深め合うことも重要な課題のひとつであるとして取り組んでおります。

しかしながら、当たり前かも知れませんが、実際に研修を担当してみると、研修員や受入側の個人の努力ではどうにもならない点もあります。

すなわち、私どもが担当している研修が研究というジャンルであるだけに、研修員の人選も含め、コースについて相手国と受入側が十分に話し合うことのできない現状は、研修で重要な部分を占める研究室での生活に、破綻を来すことがあります。これは、研修員の研修内容に対する理解不足からくるもので、まわりがいかにも努力しても、お互い

人間不信に陥るだけで、研修員として受け入れないほうが、両国のためによかったのではないかと思うケースもあります。そのような意味から、JICAにお願いしたいことは、それぞれの研修コースの内容をよく理解していただき、コースに最も適切な人材を派遣するよう相手国に働きかけていただきたいと思います。

研修を意義あるものにするため、コースや研修人員の数にとらわれるのではなく、小さな国際親善を育てるために、現場の声を取り入れ、改善する努力をこれまで以上にお願ひしたいと思っています。

終わりにあたり、7年の間、多くの研究者やTBICの方々にも助けられ、事故もなく研修を行うことができましたことを誌上を借りて感謝申し上げます。

石炭鉱山保安研修随想

工業技術院資源環境技術総合研究所

荷福 正治

「石炭鉱山保安研修コース」は昭和56年度に開設され、以来14年間で総数135名の研修員を受け入れている。世界各国からこれだけ多くの人々が筑波に集い、日本での生活を体験していただいたことは感無量である。また、これら多数の人々と人的なネットワークができたことは大変貴重な財産である。

ほとんどの研修員にとり日本での生活は初体験であり、文化、風習などいろいろ異なって、とまどい、楽しいことなど各種の印象をいただいていたことであろう。研修担当者からみても、研修員にはお国柄が出て、興味深いものがある。概して、若い人が多い場合研修コースは活動的であり、また、中南米からの研修員が多いと陽気な雰囲気の主となって来る。年配の人がいると、その人がコースのまとめ役的な存在となり、研修員の動きにまとまりがでてくる。

研修内容については、過去の経験をもとに種々改善されているが、研修員全員の満足のゆくもの

はなかなか難しい。研修員からは、座学より実習や見学の時間を増やしてほしいとの意見が毎年強く出てくるが、諸般の事情から現状では実習・見学の時間の大幅増加は困難である。実習や見学は実体験ができることから、研修員の評判はよいが、依頼を受ける会社や団体の方々にはそれなりの負担となるので、実際にはお願ひを申し上げにくいものがある。実際に各種の体験をすると、学んだものを自分たちの現場にも容易に応用できるので、研修内容の編成替えも検討の必要があろう。

日本の鉱山業界をとり巻く情勢は非常に厳しいものがあり、資源環境技術総合研究所における鉱山関連の研究にも幾多の影響が現れている。現状では鉱山関連の研究を推進することは容易でないが、世界各国の石炭鉱山の問題を研修員とともに解決できればと常々感じられる。そのため、集団研修のみならず個別研修で、かつ長期の研修を受けられれば、得られる成果もより大きくなるのではないかと感じられる。

見学旅行は鉱山のみならず計測器、石炭関連など種々の会社を訪問するので、日本の産業界の事情を知ってもらうのに非常によい機会である。見学旅行の合間には、博物館や名所旧跡などにもできるだけ案内するような配慮がなされている。これは、古い歴史を有する日本の文化・伝統を知るため非常に貴重な機会であろう。今後でもできるだけ社会勉強の機会が確保されることを望みたい。

見学旅行中に苦勞することのひとつに食事がある。昼食や夕食など、見学旅行中は街中のレストランを利用せざるを得ないが、宗教や習慣などの理由から、適当なものを探すことが大変である。ひとつの解決策として、できるだけいろいろな店の揃ったショッピングセンターへ案内し、そこで自由行動してもらっている。折角日本へ来ているのだから、日本の伝統的な食事を楽しんでもらいたいと思うが、本人の意思を尊重することも大切である。

今後、いろいろな形で国際交流がますます盛んになっていくことであろうが、世界各国との友

好・親善、経済発展、環境保全などのため、本研修コースが少しでも役立つことを期待したい。

研修員はすばらしい財産

防災科学技術研究所
竹田 厚

国際協力事業団筑波インターナショナルセンター設立15周年をお祝い申し上げます。防災科学技術研究所がJICAの「防災科学技術集団研修」を担当するようになったのは、実はTBICの設立より古く昭和52年度からで、今年で19回目になります。当時、当研究所は「国立防災科学技術センター」という名称で、研修コース名も「防災技術セミナー」となっていました。まだつくばの新庁舎に移転する前で研修の参加者や期間も現在の半分程度だったようです。

私が当研究所に赴任したのが昭和54年で、たしかその年からコースの1コマを担当してきたはずですが、当時のことはよく覚えていません。私が所内の集団研修の運営委員長を引き受けるようになったのは3年前、前任者でこの研修の開始以来ずっとこの研修コースを育ててきた木下武雄氏が退官されてからです。木下さんとともにこのコースの運営と発展に際立った力を与えて下さっているのがTBICから毎年研修監理員として来ていただいている南日育子さんです。南日さんの英・西・葡にわたる語学の才能もさることながら、その人柄と豊富な国際経験が、不慣れな私たちにとって頼りがいのあるガイドなのです。歴代のTBICの所長さん、研修課長さん、担当の方々にはいつも御理解・御協力・御指導をいただき一方、私どもの要望等にも御配慮いただき感謝しております。おかげ様で私たちのコースが充実した効果のあるものに発展してきましたし、私たちも愛着といささかの自信とをもつようになりました。

いま、この研修コースの「卒業生」は世界39カ国に174名もいるのです。皆私たちの研究所の親しい友人なのです。彼らの多くが、それぞれの国で

指導者として中堅の行政マンとして、専門家あるいは研究者として優れた仕事を遂行しています。

東京の国際会議に国の代表として出席する機会があったからといって、つくばまで訪ねて来てくれた人もいました。日本の地方の大学に留学しているのでなつかしいつくばを再訪したかったとひょっこり現れた人もいます。

当研究所の研究者の大半は研修の講師を経験しています。海外に出張する際にはあらかじめ連絡して、昔の研修員たちとの再会を果たすことも多いと聞いています。皆、大変喜んで大歓迎してくれます。私も数年前、インドネシアでうれしい経験をしました。何度か機会があり、公共事業省の技師であるラムリアさんに連絡を入れたのですが、出張中とかで通じません。あきらめていたところ、あるとき泊まったジャカルタのホテルに突然彼女から電話が入りぜひ会いたいとのこと。翌日、御主人とともに車で迎えに来てくれて市内見物やら食事やらと大歓迎してもらいました。御主人も内務省のお役人で、やはりJICAの研修で日本に半年近く滞在したとのこと。数日後返礼で私が招待した際も、夜更けまで話は尽きませんでした。

自然災害による莫大な人的物的損失が南北格差解消を阻害する大きな要因として、その防止、軽減を図ることが、現在、国際的な重要かつ緊急な課題になっています。国連は1990年代を「国際防災の10年 (IDNDR)」と決議、そのための活動を展開しています。防災先進国日本が国際的に担うべき役割はいろいろありますが、私たちの研修コースもその一環をなすものと強く自認しています。世界有数の自然災害多発国日本にとっても防災科学技術に関する世界中のデータが必要です。風水害も地震・津波・火山災害も、その予知・予測のためにはグローバルな情報が不可欠なのです。

その意味でもJICA/TBICとの協力によって、世界中に「防災」の友人を増やしていくことは私たちにとってすばらしい財産を得ることなのです。

TBICのますますの御発展を期待します。

回想15年

建設省建築研究所

飯場 自子

TBIC設立15周年おめでとうございます。あっという間の15年でした。

当研究所の筑波移転が昭和54年3月でして、55年3月にTBICが設立される間の約1年間、いろいろと四苦八苦致しました。

このはざまの時期を思い浮かべてみますと、まず、地震工学コースは54年まで八王子国際研修センターの所管でした(担当は熊谷さん)。移転に伴い、TBICの設立まで本部の所管に入り、54年3月から5月半ばまで、研修員は、当時は市ヶ谷にあった東京国際研修センター(TIC)に移動し、研修は、経済協力センタービルの教室をお借りして、私と研修監理員(小林さん)のふたりで、何とか集団講義の期間を終了しました。移転事務で研究所とうまく連絡がとれず(仕事場だけでなく、個人の家の引っ越しもありましたからね)、本部の担当者だった木下さんに大層助けていただきました。木下さん、大変お世話になりました。

54年7月までのコースは、なんとか終了しましたが、54年9月からのコースが問題でした。さて、どこに宿泊させるか。つくば、土浦近辺では、ホテルは確保できませんでした。電話帳を繰って、水戸にやっと確保できたのは、研修開始時期も近くなったころです。研修員はチャーターバスと電車で、水戸から毎日通って来ました。事故もなく、よく通い通してくれたものです。

苦労したせいかこの年の研修員のことはよく覚えていますが、たとえば、バスにはガイドさんが乗っていて、演歌「道づれ」(当時流行っていた)を教えてもらい、パーティーなどがあると、いつでもどこでもお経のように歌っていたことや、見学先で「知っている日本語は？」と聞かれると、皆で「ともべー、ともべー、いしおかー、いしおかー」と常磐線の駅名を連呼して苦笑させられまし

た。当時の管理室長(故小森さん)も研修員が大好きな方で、今はTBICがやって下さっているホスピタリティー行事をよく計画し、上野動物園や鎌倉の大仏様を見に行ったり、果ては、ご自身の宇都宮のご実家に泊め、兄弟親戚を動員して日光見学に連れて行ってくれたこともありました。私も週末に、研修員に頼まれ、美容院や日本人の友達の家についていったものです。週日の仕事に加え毎週末のご奉仕でいささか疲れ気味のころ、TBICができ、研修員もやっと落ち着くべきところに落ち着き、私もほっとしたわけです。

TBIC設立のころは、今よりも(失礼)随分いろいろな意味合いで緩やかで楽しかった(昔は、どこの機関でもそうだったのかもしれませんが)ような記憶があります。最初の当コースの担当は、新垣さんでした。研修員の買い物につきあって新垣さんのスポーツカータイプの車に同乗させていただいたこともありました。そうそう最初のころにTBICの体育館で親善パーティーに出席させていただいたところ、立食と思っていたのに、地元の皆さんが思い思いに体育館の床に丸くなって座っておられたのが印象的でした。TBICにもよく遊びに行きました。研修員の手料理をご馳走になり、オーディオルームでお国自慢の音楽を聞かせてもらっていると、他コースの研修員も集まってきて楽しい時を過ごしたことを覚えております。

ODA政策が続く限り、JICAの役割は大きく、TBICも単なる物理的な研修員の宿泊所ではなく、つくばにおける彼らの心の拠り所として存在すべきだと思います。当所を含めて、国の機関は、どうしても頭が固くなりがちですが、国際機関としてTBICは、ぜひその柔軟性を存続し、まずもって、研修員を第一義として考える機関として、さらに発展されることを期待しております。

研修員との思い出

農業生物資源研究所
中川原 捷洋

月日が経つのは早いもので、植物遺伝資源をテーマに集団コースが始まってから14年を迎える。多様な遺伝資源は主に低緯度地域に存在するため、本コースは、本来の研修目的に加えて、世界の遺伝資源の現状と将来を目のあたりに見る貴重な機会でもある。すでに26カ国から125人の研修員が育ち、遺伝資源研究国際交流の要になっている。幸運なことに、このうち第2回コースから現在に至るまですべての研修員と生活をともにする機会を与えられたことは個人的にも貴重な経験となった。

本コースに参加する研修員は基礎知識をきちんと修めた第一線級の研究者が多い。約1カ月続く講義では今日的な議論が活発に出るし、遺伝資源を集め（探索収集）、評価し（遺伝解析）、維持・配布する（遺伝資源管理）過程のいずれかには個別実習がある。そこでは肌と肌との触れ合いがあり、研究者として互いを研鑽し合う間柄となる。この間には忘れられない奇事、珍事が続発する。

ある年、TBICのなかに虎刈りの研修員が異常に増えたことがあった。これは、わが家へ遊びに来たある研修員が、レザーカットで自分で散髪する筆者の方法を見て技術導入し、これをTBICの仲間に広めた結果であった。自前で散髪するのはアジアの研修員が優秀である!?

遺伝資源の実習のなかには、実際に幾日も日本の農家や田畑を訪れて進める分野がある。ここでは、衣食住・言葉・宗教などの習慣にさまざまな特色が出るし、交流も深まるが、そこに至るまでには悲喜こもごもがある。テンドン！ 発音がやさしい。旅の途中の昼食で幾日もテンドンだけを注文して過ごした研修員、和食が合わずご飯とコーラで済ませたオッチャン、等々。

海外で遺伝資源の探索収集をする場合、宿泊施設のない山の中に入り込むこともある。研修の内

容には実習としてテントを張って自分で料理をつくることなどもある。ここで生まれた国際的料理「トムヤム・スープスパゲッティ」は今でもわが家の定番メニューとなっている。

探索実習2日目の朝、理論派の研修員が昨夜は寒くて眠れなかったと言う。詳しく理由を聞くと、寝袋を枕と間違えて何も着ずに寝たという。お国がちがうのである。事件は常に起きる。

遺伝資源研究は総合的な広い知識と経験が必要であるばかりでなく、遺伝学を基礎としたハードな深い実験研究も要求される。来日直後の「慣らし運転」の生活から、研修成果をまとめていく過程で、次第にたくましい研究者の顔になっていく。生涯にわたってかけがえのない人間関係ができていく。

当初数年間はコース運営をどうするか試行錯誤の連続だった。現在やっとこんな感想を言える状況になった、われわれも多くを勉強したものだと思う。海外に出張をする。コース修了生たちが陰に日向に支援をしてくれる。

遺伝資源は「生物多様性条約」の発効とともに、地球規模で考え、国際関係を抜きにしては考えられない。今後ともこのコースの果たす役割は大きいし、各国に散らばった研修員の活躍を期待している。

研修員の思い出

地質調査所海洋地質部
中尾 征三

国連海洋法条約に基づいて、深海底鉱物資源(マンガン団塊)の鉱区を獲得した者(国または企業)は、同条約によって設立される国際海底機関のスタッフ候補者を要請する義務を負っている。わが国は、平成5年5月17日から平成6年2月27日までの間、3名の研修員(①地質学・P.コーピナクタイ)、②地球物理学・E.ホァン<韓国>、③電子工学・M.モハマド・タヘリ<イラン>)を受け入れることとなった。

東京での5週間の日本語研修を終えた彼らは、当時TBICが満室であったため、つくば市内のホ

テルに投宿した。6月21日の朝、彼らをホテルで拾ったあと、ちょうど、当日出港することになっていた調査船「白嶺丸」の船内見学と見送りのために千葉県の船橋港に出かけた。道すがら、食習慣の話になり、イスラム教徒であるタヘリ氏が健康上の理由もあってベジタリアンだと知った。ただし、ごく普通の魚を加熱したものは食べるという。「要するに、魚の形をした魚は食べるのだな？」と、念を押すと、そうだと言う一方で、エビは大好物だがカニはダメだとも言う。彼のお陰で、イスラムの教えに則って処分され、彼らが食することを許されている肉類を、ハラール・ミート（ハラールは英語のアラウドにあたり、文字どおり許可されたという意味）と呼ぶことを知った。

ホアン氏は、韓国の行政機関に籍を置く人で、日本語（とくに日本文の読解力）に優れ、コピーナ氏ともども、飲食両面でまったくといってよいほど好き嫌いのない人であった。九州方面に研修旅行に出向いた折には、2夜とも馬刺を楽しんだ。コピーナ氏は、米国フロリダ州のある大学で修士の学位を取得しており、快活で、地質学専攻ということもあって、最も手のかからない研修員であった。雪を見たことがないという彼のために、1月中旬の蔵王に手の届く研修旅行を計画した。山頂の樹氷を見たあとで、少し凍っているのではないかと思うほど冷たいビールを飲んで、体を温めた(?)のを昨日のここのように思い出す。

私にとっては、個別研修員の受入れは初めての経験であり、彼らの希望を聞いてから注文すると参考書（もちろん洋書）の入手に2カ月はかかることや、レンタルのパソコンには英語版のOSが装備されていないことなど、数々の見込み違いから彼らにはずいぶん迷惑をかけたと思う。また、この訓練の途中には、ハワイ～ハワイ間の6週間の船上訓練（深海資源開発㈱の費用）があって、そのために、日本からの出国・再入国があり、必要な手続きが滞りなく進むかどうかとも心配であった。実際に、タヘリ氏の米国査証の取得やハワイでの乗船手続きに関して、見込み違いや若干のトラブル

もあったと聞いている。

それはともかく、この難事業が無事終了したのは、外務省、通産省、国際協力事業団、深海資源開発㈱、および地質調査所の関係各位のお陰である。とくに、TBICの塩野広司氏、吉田ひとみさん、(財)日本国際協力センターの石井潤子さん、それに地質調査所側のコーディネーター・飯田淳子さんに感謝して小文を結びます。

研修員との思い出

地質調査所海洋地質部

上嶋 正人

沿海鉱物資源探査集団研修コースは昭和42年から平成3年まで25年間続いた伝統ある研修コースで、私と村上（同部）は最後の2年間を担当した。研修員は毎年約10人で世界中のいろいろな国から参加していたが、特にインドネシア、韓国、フィリピン、タイが多く毎年のように参加していた。最終的には延べ35カ国、261人の研修員がこのコースに参加した。

例年、研修プログラムでは6月から9月までは月1回の割の研修旅行を含み、集中講義、室内実習を行い、10月から12月上旬までの2カ月はひとりずつ専門科目を決めての個別研修を行うというパターンでやっていた。彼らは皆まじめで難解ともおもえる講義を毎日のように受けていたが、10人全員に必要とされる講義、実習プログラムは本来不可能で、今考えるとかなりの負担になっていたかとも思われる。

研修旅行は6月北海道、7月地質調査船「白嶺丸」、8月新潟、駿河湾沿岸海域、9月九州、関西といったふうに、月1回約1週間ずつかけて日本各地の関連企業見学や野外調査実習を行うもので、研修員には一番評判がよかった部分と思われる。研修旅行は研修員全員が毎日行動をともにして一番親睦を深められた時間で、われわれもいま真っ先に思い出せるのはこれらの研修旅行のときの彼らである。

最後の個別研修は2カ月程度とひとつのテーマをこなすには期間が短いとはいえ、集中して勉強できるということで研修員の評判は総じてよかったように思われる。ただし逆に、引き受ける立場からみると、短期間とはいえ研修員を引き受けられる人を10人見つけることは困難で、特に最近では研究環境に時間のゆとりがなくなってきたのかOKしてくれる人がなかなか見つからず、担当者がみずから個別研修を引き受けたケースも見られた。

コースの運営に関しては、これまでの先輩担当者たちの永年にわたる努力の成果ではあるが、講義、実習を行っていただく先生方もだいたい決まっています、依頼の公文書を送付する程度で順調に進んだので、手間がかかるとはいえ担当者としては大変にやりやすい研修だったといえる。研修員の要望の多様化、研究環境における余裕のなさによる研修の受入先の減少など困難な問題を抱えていたとはいえ、終わってみるとなづかしく思えてくる。しかしながら研修員の専門の分化が進んできているので、開発途上国といえども研究者、技術者に対しては、全員に同じ講義をするという集団研修では対応しきれない時代になったこともおそらく事実である。

最後にこの研修の順調な運営のためにお骨折りくださったTBICの村田俊一氏、研修員の旅行の面倒を見ていただいた研修監理員の中村彰子さん、清水太郎氏に感謝します。

〈消化器癌病理学コース〉あれこれ

東京医科歯科大学医学部病理学講座

中村 恭一

「消化器癌病理学コース」は1984年から1990年の間、筑波大学で8回開催され、1991年からは東京医科歯科大学で開催されるようになりました。今年9月には第13回消化器癌病理学コースが開催されます。このように本コースが長く続いているのも、講師諸先生、大学当局およびTBICの多大なる協力なくしては成り立たず、まずはこの場を借り

てお礼を述べさせていただきます。

早期胃癌に関して日本は世界をリードしています。このことは、日本ではX線医、内視鏡医そして病理医が早期癌診断ということを目的として、各分野の壁を外して一致協力して診療・研究を遂行してきた成果であり、いわば三位一体の体制によってもたらされました。

このコース設立の動機は何かといいますと、「第26回外国人医師早期がん診断セミナー」が今年3月に終了しましたが、このセミナーの研修員は臨床医が中心であり、病理医はごくわずかです。セミナーに参加した数多くのX線・内視鏡医がそれぞれの国で活躍し、早期癌を発見するようになりましたが、セミナーの帰国研修員から「X線・内視鏡的に早期癌であるが、病理医が癌と診断してくれない」との苦情をまねならず耳にするようになりました。セミナーの帰国研修員はほとんどがX線・内視鏡医であり、それぞれの国においては三位一体の組織づくりが不可能な状態にあったわけですから。これを契機として、臨床分野の帰国研修医が多数活躍している国で早期胃癌診断・研究の三位一体体制を樹立することができるようにと、病理医のための消化器癌病理学コースが実現したわけです。

このコースを始めるにあたって対象国が問題となりましたが、それぞれ一國一都市に一個の種子を蒔くよりも複数蒔くことによって三位一体樹が育つ確率は高く、また寒冷地にゴムの木を植える恐かなことはせずに、セミナーのX線・内視鏡帰国研修医が多く活躍している国という方針で対象国を特定したのがコース成功の鍵であったと思っています。第8回コース終了後、帰国研修員フォローアップということで各国を巡ってきました。一般的に、外国ではX線・内視鏡・病理医の間の関係は粗であり、三位一体体制の樹立は難しいと思っていました。ところが、各都市ごとに三位一体体制をもって早期癌の発見に努め、かなりの成果を挙げていることを直接目にし、感激した次第です。国際学会などで再会すると、同窓会を開いています。

第3章

研修関係者

TBICの思い出

前・JICE筑波分室主任

桑形 久夫

TBICは私が財国際協力サービスセンター（現JICE）に入り、研修を実施する立場から実施のお手伝いをする側に回り、また研修監理業務も筑波分室を作ってサービスセンターが全面担当することになって、その裏方業務全般をひとりで処理するために、連夜10時前には牛久駅には到着できないという厳しい毎日を送ったのも、今は懐かしい思い出となっている。

そのなかでもやはり真っ先に頭に浮かぶのは交通の不便さであった。道路は素晴らしく整備され、自動車通勤者には快適このうえない環境ではあるが、電車・バス通勤者には見捨てられた世界であった。

始発は近いし、途中渋滞する所などないはずなのに、いつ来るかわからぬバスを寒さをこらえながら下横場入り口バス停で待つ辛さは、やはり体験者でないと理解し難いことである。

TBIC付近が6カ月間突然賑やかになったことがある。10年前の科学万博の開催期間である。TBICの前の畑300坪あまりがローラーで固められ、ビニールを敷きつめた上に簡易舗装が施され、あれよあれよと言う間にプレハブの宿舍が立ち並んだ。日本各地から万博を訪れる修学旅行生徒の宿泊施設ができあがったのだ。連日10台以上の大型バスが5km離れた万博会場へのピストン輸送に

活躍し、閑静な松林は若いエネルギーのあふれる騒音の巷と化してしまった。しかし、万博が終わるや否や、またあれよあれよと言う間にプレハブは撤去され、舗装ははがされて夏の穂のそよぐ田園風景に逆戻りした。

TBICは電車・バス通勤者にはまことに不便極まりない田舎であるが、研修員とくに理学系の人にとっては理想的な環境にある。43ある国立研究所から、それこそ選りどりみどりで最先端の科学技術に触れ、学ぶことができる。しかしここでも交通が大きなネックになっていた。朝晩の定期送迎はあっても実験などで帰りが不定期になることが多い研修員には、自由に行動のできる自転車をもっとも便利な交通手段であった。まったく平坦で、かつ広い道路の筑波は自動車にも自転車にも快適な環境ではあるが、それは一面交通事故の多発の原因ともなっている。

みなが恐れていた交通事故が起きてしまった。実験のため帰宅が遅れた研修員が暗闇の国道を無灯火の自転車で横断中はねられてしまった。不幸中の幸いというか、はねた運転者は医師で、直後の処置がよかったため2カ月の入院で後遺症も残らず全治した。この事故が他山の石となったため、その後は自転車の事故は起きていない。私も事故直後に病院に駆けつけ、血だらけのズボン、シャツを鉋で切り開いた記憶がまざまざと脳裏に残っている。

ある月曜の朝のロビーでの出来事をご報告しよう。7カ月間の集団研修の研修員男女が椅子にびったり寄り添い、頬をつけあって1枚の新聞を読

んでいる。私の出身研究所のコースでもあり、そのふたりとも親しかったので、「新聞と一緒に見るのはよいが、やはりもう少し離れて見たほうがよいのではないか」とそっと注意した。すると「私たち昨日教会で式をあげ、夫婦となりました」と言われて仰天してしまった。同じカソリック教徒ではあるが、東南アジアと南米の組み合わせである。あわてて祝辞を述べたが、それ以後の研修、特に研修旅行はハネムーンの雰囲気、仲間の研修員を大いに悩ましたとか。研修終了後は一旦それぞれの母国に帰り、東南アジアの女性の方が南米へ移住するという手筈になっていたようだ。

自転車というと、私もよく農林団地の郵便局に通ったものだ。団地の圃場には春は菜の花にひばり、夏はかっこうの声とまことにベートベンの「田園交響曲」そのままののどかな光景に満ちあふれ、仕事疲れの脳味噌を柔らげるのに格好のサイクリングコースであった。ある日、例によって自転車を走らせていたとき、とあるアパート風の家から若い女の子が出てきて、いきなり「てばな」をかむのに出くわした。

「てばな」と言っても育ちのよろしい皆様は御存知ないかも知れないが、鼻の片方を指で押さえ、もう一方から勢いよく息を出して「はな」をかむ手段で、田舎ではごくありふれた光景であり、実は私の得意技でもあるが、若い娘が人前でやるのに出くわしたのは始めてで、本当にびっくりした。時間もお昼近くなのにその娘はバジャマ姿である。すると別の娘が歯を磨きながら現れた。好奇心から自転車を止め中をうかがうと、なんと若い男女が大勢いるではないか。実は東南アジアからの出稼ぎ男女の宿舎であったのだ。巷に灯がともるころ出勤し、明け方に帰宅する彼ら、彼女らにはお昼どきはまだ早朝なのであろう。こんな田舎に稼げる場所があるのだろうか。TBICにも同国人は多いことだろう。これも国際交流の一面なのであろうか。心のふさがる一日ではあった。

筑波センターの思い出

JICE研修監理員
末次 晴代

あつという間の14年だった。40を超える国立の研究機関を擁し、先端的な研究開発を進めるこの筑波に当然のごとく、科学技術面での国際協力を進めるべく筑波インターナショナルセンターが設立された。その1年後に「物理探査」の研修で来日したケニアの地質学者マカリアさんに同行した鹿児島への10日間の研修旅行が、私の初仕事である。研修監理員のノウハウなど知る由もないまま、観光旅行で訪れる場所とは一風異なる目的地をめざして、ひたすら地図と概略の日程表を片手に孤軍奮闘。隠しきれない私の緊張と不安を察知して、マカリアさんは、さぞかし心細かっただろう。阿蘇山や桜島の「地質巡検」の際は、この専門家に何を見てもらえば研修の成果が上がるのだろうか、と専門知識が皆無の頭を悩ませながら現場で四苦八苦。旅の最後に金鉱に入り、金鉱脈を含む石をお土産にいただきほっと一息つきながらも、その後の仕事に対する一抹の不安とともにTBICへと帰り着いた覚えがある。サイエンスの素養もなく科学的思考もできない自分が技術通訳をしても、研修員にどれだけ役に立てるのだろうか、と。

しかし、本当にありがたかったのは、意気消沈した私を、当時の研修課長さんは大きな笑顔で迎えて下さり、ご自分の研修監理員としての体験からアドバイスをたくさん下さったことだ。「技術移転のプログラムのかなで、たとえ専門家でなくとも、異なる文化圏の人々の仲介役となって意思疎通を成立させることができれば十分ですよ」。この言葉は、そのときの笑顔とともに今でも忘れがたく、励みとなり、その後14年の研修監理員としての道へと続いたような気がする。ときどきふと、マカリアさんのことを思い浮かべながら。

TBICの研修コースも年々増えてきて、筑波の状況を反映して研究センターのコースも多くなった。

これまでさまざまな分野のコースを担当したが、研究型よりも講義・実習中心型のコースのほうが、内容についても研修員についても学べるが多くおもしろかった。特に「鉾山保安」「河川・ダム工学」「防災科学技術」などのコースは、常に研修員と行動をともし、現場に踏み込んでいくという具合で、3カ月も一緒にいるとまさに「同じ釜の飯の仲間」意識ができあがり、つらい別れをもう何度経験したことか。研修員にもお国柄があって、来日したてのころはTBICの周りは畑ばかりで交通の便も悪し、まるで収容所に入れられているみたいだ、と不満ばかりもらす人もいれば、その田畑が自国の風景に通じるところがあって東京ではなく筑波の研修でよかったと安心する人もいる。そんないろいろな考えをする人たちも、研修が進むにつれ、次第にTBICのなかに国籍も言葉も違う「家族」を構成するようになる。研修旅行に出て疲れが出てくるころには皆に、TBICに帰りたいなどと「里心」がつく。TBICが「里」になるのも、田園風景とそこで働く人々の気持ちの温かさによるところも大きい。1990年、湾岸戦争のさなかに「河川・ダム」で来日したイラクの研修員がいたが、張りつめた空気の中、コースの仲間やTBICの人たちの思いやりにずいぶん支えられていた。

思い起こせば限りなく、これまでに出会えた研修員の顔が次々と浮かんでくる。今はすでに定年退職をして昔がとても懐かしいのか、筑波で教会に通っていたころの思い出をよく手紙に書いてくれるフィリピンのニトさん(防災)、オーストラリアにも留学したけれど、やっぱり親切な人がたくさんいた筑波が大好きと私費で再来日したタイのウィロエさん(養蚕)、自分の結婚式に招待してくれたグアテマラのフリオさん(野菜)、エジプトの研修員と結婚して子供も生まれ、ふたりで事業を興して獣医の仕事をやめてしまったメキシコのクリスティーナさん(家畜衛生)などなど、いつか再び会ってまた話をしたい人ばかり。逆に、もう2度と会えない人かもしれないという思いで接し

た人たちだからこれほど懐かしいのか。これからも、自分の研修員リストに新しく名を連ねてくれる人々に会うのが、やはりこの仕事をしていて一番楽しみなことだ。

最初の授業

JICE日本語講師

宮本 康仁

最初の授業は程度の差こそあれ普段よりも緊張する。セミナールームに入ってプリントやテキストを緩慢には感じられない程度にゆっくり机に置き、一瞬全体を見渡してからはっきりと大きな声で「おはようございます」などのあいさつをする。研修員が「おはようございます」と返してくればそれでよし、そうでなければもう一度繰り返し、目で促してみる。続いて自分を指さして「私」。それを研修員にも言わせる。

次に私が「私は宮本です」、個々の研修員が「私は～です」と言う。なかには「私は宮本です」と言ってしまう者もいる。それまでの雰囲気を見て大丈夫だと思ったら、あなたも宮本さんですかといったことを少々大げさにあらわす。笑いが起こる。こうすれば、とりあえずこちらのペースと緊張が少しほぐれてくる。来日して間もなく、緊張の連続であろう研修員に少しはリラックスして日本語の授業に入ってもらうために、こちらも緊張しているのである。

TBICでの日本語講習ではほとんどの研修員が日本語を学習するのははじめてである。学習時間も、研修プログラムの一環として組み込まれている集中講習で、平均50時間とけっして長くはない。学習内容も限られる。広い意味でのあいさつや慣用表現とごく基礎的な文章を示せるぐらいであり、最低限の道具としての言葉を教え、コミュニケーションの助けとすることが目的である。夜間に行うオプションのクラスを加えると、このような入門クラスを1年に30以上開講していることになる。

私はそのほとんどのクラスで先に書いたような最初の授業を担当し、半数のクラスでは25時間から100時間の授業を行っている。そのようなわけで、4年半の間に100回ほどの最初の授業というものを経験してきた。提出する内容はほとんど変わっておらず、授業の進め方は何度かの試行錯誤の末、ほぼひとつの形ができています。要するに毎回研修員が新しくなる以外はほぼ同じことを繰り返しているのです。それでも、個々の研修員の反応やクラスの雰囲気はさまざまで、興味深いものである。実は、同じことの繰り返しに時には違ったことをしてみたい気持ちもあるにはあるが、人間を見る、相手にするという点ではやはり面白い。あるクラスに積極的な者が少なくともふたりいれば全体が積極的になりやすく、逆もまた其である。

ただ、積極的といえど歓迎したいものもあれば遠慮願いたいものもある。やたらと質問が好きな者や勝手に先へ先へと進んでしまう者に困ることもある。最初の何回かの授業でクラスの性向が見えてくると、それぞれに合った練習を取り入れたり、対応のしかたを考える。授業もコミュニケーションであるから柔軟に対応したいと日々考えている。

TBICを去る日はいつかやって来て、いろいろな思い出が残るだろうが、たくさんの最初の授業に強い印象を持ち続けるだろうと思う。

オリエンテーション —日本の教育—

筑波大学
村田 翼夫

筑波インターナショナルセンターにおけるオリエンテーションの一部として、日本の教育に関する講義をさせてもらって10年くらいになる。いろんな国の研修員に講義をしたが、予想外に多かったのは、アフリカ諸国や中近東諸国の研修員であった。

興味深く聞いてもらった講義の内容としては、「わが国は、欧米の先進科学技術や教育・社会制度

をいかに吸収し普及してきたか」「公立学校の設立・普及にあたり、地方の人々がいかに協力したのか」「わが国の学校経営における集団主義的特色」などであった。

講義に対する質問は、中南米、中近東、南アジア諸国の研修員に多く、東南アジアや東アジア諸国の研修員からは相対的に少なかった。英語能力が関係しているのであろうが、講師や講義に対する考え方や態度も影響していると思われる。多く出された質問のうち興味深いものに次のようなものがあった。

- ・日本の学校ではどうしてドロップ・アウトや落第が少ないのか。
- ・高校卒業生は、どういうところへ就職するのか。
- ・新聞で児童・生徒のいじめや登校拒否が多いと報じられていたがどうしてか。
- ・生徒たちは、どこで、いかなる職業教育や技術訓練を受けるのか。
- ・日本へ留学するにはどうすればよいか。奨学金はもらえるか。
- ・日本の教員や社員は、退職後、退職金と年金の両方もらえるのか、それはいくらくらいか、などである。

ユニークな体験としては、マンデラ首相が誕生する前の南アフリカ共和国の研修員に対する講義であった。日本の教育についてある程度講義したところ、何人かの研修員が「南アフリカ共和国は、日本の教育を適用できる状態にはない」と言い出した。「では、どういう状態にあるのか」と聞いたところ、彼らは、その社会的、教育的状況について話し始め、私は聞き役に回ってしまった。また、昨年のものであったが、カンボディアと他の東南アジアの国の研修員がわずか4人しかいないときであった。私が日本の教育状況をしばらく講義した後、彼らの国の教育状況について質問した。そのとき、カンボディアの研修員は教育政策に携わったことがあるということから、教育の困難な情勢（教員・校舎・施設設備・教材の不足、地方の学校の近くに地雷が埋めてあって近づけない、な

ど)について熱っぽく説明してくれて、私のほうが講義料を払わなければと思ったくらいであった。

6年前になるが、私が筑波大学で世話をしている外国人教員研修留学生でメキシコ出身の女子教員が、筑波インターナショナルセンターに来ていてメキシコ男性の研修員と恋仲になり、帰国後結婚したと聞いている。筑波大学の留学生が、筑波インターナショナルセンターの研修員の招きで、しばしば、テニスや水泳を楽しみ、その交際の間に恋も芽生えているようである。望むらくは、外国人研修員が日本人学生・研究員ともっと交流する機会をもてればよいのではないかと感じている。

いずれにしても、多くの国の研修員と出会える機会を提供してもらい感謝している。筑波インターナショナルセンターの一層の発展を期待しかつ確信している。

コンピュータ・コースと私

地質調査所海洋地質部
岸本 清行

TBIC15周年おめでとうございます。

いままTBICで10年以上にわたって続いているコンピュータ・コースと関連して、私とTBICとの思い出という形で述べさせていただきます。

私とTBICとの出会いは、昭和57年に現職、地質調査所海洋地質部に配属されたときにさかのぼります。TBIC主催の英語研修コースに所からの命令で(実際はみずから希望して受け入れられた)受講したときに、TBICという組織があることを初めて知りました。私は確かこのコースの第2回生であったと記憶しています。そのときの地質調査所からの同期生に、大先輩であり、かつTBICコンピュータ・コース発足に多大な労力を捧げられた桑形久夫氏がおられました。実はこれを契機として私自身がその後のコンピュータ・コースのお手伝いに引き込まれていくことになるのは誰が想像できたでしょうか? 桑形氏は当時中東地域での長年にわたる出張から帰国したばかりで、ア

ラビア語は現地人と区別がつかないほど堪能だったばかりか(当時、ヤマニ石油相に個人的に電話をしても取り次いでもらえる日本人だったという伝説的な人物でした)、英語に何らの困難を感じていないことは、初日の講習会で明らかでした。しかし、TBICの英語研修コースの目的は、技術系専門職として英語で講義もしくは指導する技術を身につけるということだったのです。その後も、この研修コースでお世話になったつくば在住の研究者は多いことでしょう

話を戻しましょう。TBICでの夜間の課外活動(?)の一環として、パソコンを研修員に教えてくれる人を探しているという話が、地質調査所の海外室から海洋地質部に持ち込まれたのは間もなくでした。当時、まだNECのPC88というのが最新鋭であったと記憶しています。パソコンの天才(オタク)と呼ばれていた西村清和氏、上記コースの第1期生で、現東大海洋研究所教授玉木賢策氏、マルチリンガルまたは語学の天才の評価のあった石原丈実氏、そして単なる桑形氏の同期生だった私の4人で始めたのです。機種を選択、教材の作成、講習内容の組み立てすべて4人でやりました。といっても、ディスクBASICを使って簡単なプログラムを自分でつくれることを目的にするしか選択の余地はなかったと記憶しています。

最初は、ふたりに1台で、プリンターもついていませんでした。電源をいれるタイミングを間違えて、ROM-BASICが起動してしまい、フロッピーディスクを読めないと訴える研修員が半数以上でした。Windows上でLotus1-2-3やWorksなどの統合化ソフトを使い、レポート作成のための入門コースになっている現在の内容とは隔世の感があります。しかし、いまでも当時のことで必ず思い出されるのは、コースの最終日になって、これで終わりますと告げたときに、受講生全員が拍手してくれたことです。初めは、うまく作動しなかったり、わからないときはコンピュータが壊れているんじゃないかと主張していた人たちが、とてもおもしろかったと言って体じゅうで喜ぶのを見

て感激したものです。

世界中にコンピュータが普及した現在では、講習内容で感激するものを与えたりすることは皆無に近いと思いますが、教える者と教えられる者の関係が講習会最終日に向かって徐々に変化して、ある種の満足感のようなものが残るのは今も昔も同じような気がします。TBICが与えてくれた貴重な機会に感謝するとともに、今後のますますの発展をお祈りします。

My dear friends of Tsukuba

TBIC英語コース元講師
南山大学教授 Harry Wray

My relationship with the Tsukuba International Centre goes back to the time when I was teaching at Tsukuba University from 1986 through 1990. I was involved in two programs. By one program it was my pleasure to teach English for three years once a week for approximately four months to various Japanese researchers and office staff in the Tsukuba area. That gave me the opportunity to meet some very interesting people and to develop some good memories. Two things we tried to do in that class were to make learning English fun and to give each person greater confidence in their English ability. Accordingly, during the English program we usually held two parties, one "ice breaker" at the beginning of the English program and another at the end. When students finished the course they had to give a final speech about their research or office work. I learned a great deal from those speeches and was pleased by the students' improvement in confidence. I can still see all of the students we taught in my mind's eye. Two very good friends I made during that time were Mr. Matsuzaki and Mr. Tatsuo Kimura. After

the first year's program ended I continued to teach some of those "students" at my home once a week. When I left Tsukuba to move to Yokohama National University I found a replacement teacher. Some of those students are still meeting once a week to study English. I enjoyed teaching the JICA program so much that I commuted all the way from Yokohama to Tsukuba for the four month long program.

The second program in which I participated was that of providing foreign researchers in the JICA program with information about Japanese education and history. The participants came from all over the world and had such interesting backgrounds. I think they appreciated that I tried to be very objective about the strengths and weaknesses of Japanese education.

But what I remember most about JICA itself is the friendly people on the staff, the cleanliness of the building, and the relaxed atmosphere on the first floor and cafeteria. In particular, I remember most fondly the two directors of the JICA instructional program for foreigners and the English program, Mr. Hisao Kuwagata and Mr. Ken Yoshioka. They worked hard for the students and always tried to make my teaching experience very comfortable. Later when I went to Okinawa Mr. Kuwagata and his wife spent a day taking my wife and I for a drive around the main island.

I remember one time when I had not time to eat before teaching a night English class. I asked the pleasant young lady who always brought us tea if she could buy some cookies or some snack for me to eat during the break time at the end of the first hour's class. But Mr. Yoshioka told her not to accept my money. Thereafter, Mr. Yoshioka always saw to it that

we teachers were served tea or coffee and cookies before class and during the break time. It was that kindness which touched my heart. In addition, I often enjoyed traveling back to Ueno and Yokohama with Mr. Yoshioka when he taught me much about Japanese life. Thank you JICA and Mr. Yoshioka and Mr. Kuwagata for the wonderful memories.

第 4 章

研修員から

Memories of TBIC

Anita P. Rivera, Philippines

化学技術研究 (平成元年度)



CONGRATU-
LATIONS to TBIC
on its 15th year anni-
versary. It's already
five years since I was
at TBIC Rm #323 but
the memories are

still vivid. It's because except for occasional feelings of homesickness I enjoyed every minute of my stay in Japan. I can still very well remember the first time I set foot on the doors of TBIC. It was on Monday, 4 Sept. 1989 at 10:00 P.M., I was with another Philippine trainee, Ms. Bella Roan (now Mrs. Redoble) and we were met by the TBIC chief front-desk man Kowatari-san. The days that followed summed up to a whole year that was truly memorable and fruitful. Thanks to the combined efforts of JICA, TBIC, & NCLI (now Nat'l. Inst. of Materials & Chemical Research). At TBIC I came to know and later be friends with a lot of people from almost all over the world. The center with all its amenities and facilities became a perfect venue for international fellowship, friendship, & interaction. The efforts

the management did to make every participants' life happy & worthwhile was quite outstanding. The management did its best to attend to the language barrier problems. Not only did it provide us with classroom lessons of the language but it also brought us into contact with the local folks from time to time so that we can practice the language and learn more about their culture. The training also provided us with a number of observation tours which all made an impact to me specially the visit made to the historical mark of Hiroshima. When JICA representatives Dr. Tanaka, Dr. Kosugi, and Mr. Nagaishi visited our institute last 2-3 Sept. 1994 as part of the JICA's follow-up program, I was filled with joy & reminiscence asking about our former coordinators, language teachers, front-desk people, etc. It made me sad to learn that Kowatari-san died in a car accident.

To sum it all I should say that I learned a lot from my one year training in Japan. It helped me to gain more confidence in myself to become a better worker back home in the Philippines. Again, I wish to thank the management of JICA, TBIC, and NCLI.

MORE POWER TO TBIC! MABUHAY!

Happy 15th Anniversary TBIC

Rosa E. Moreano Salas, Peru

河川及びダム工学 (平成元年度)



Six years ago, from July to October 1989, I attended the training course on Rivers and Dams engineering. During that time I stayed at the Tsukuba International Center. I guess, I was a very lucky Peruvian woman who have the chance to take that course in Japan.

Writing this lines, I remember the grateful moments I lived in Japan; I had the chance to know the very kind Japanese people as well as other people from different countries at TBIC. I can say that Japanese culture is very different from ours in many aspects, but at the same time a very surprising one. Also I was able to appreciate the contrast from ancient to modern Japan.

It is pleasing to remember the experiences I lived at the various Japanese cities I visited, during the study tour trips they organized as part of our professional training.

Those trips gave me the opportunity to know Japan from Hokkaido to Okinawa; Visiting some works in their execution and operation stages. I observed the magnitude of hydraulic works, the Japanese construction methods, the organization, the execution, economic of such works, the Japanese skill to use new technologies etc.

I am from an underdeveloped country, but all experiences I learned in Japan give me a clear vision to enhance my technical criteria in

that civil engineering field. Up to now, we have not yet developed our own technology but we use to adapt techniques from developed countries and that is the reason why traveling is always a good way to know better the state of the art.

Now I keep in touch with some of my fellow participants in the course, and with a Japanese engineer I knew at the Public Work Research Institute; Ph D. Yoshikazu Yamaguchi whom I maintain some technical communication, I want to thank him for always assisting me.

My best regards to all of participants, Happy 15th anniversary TBIC, and thank you Japan.

Memories of the Training in Japan and TBIC

José Eduardo Jorge, Brazil

自動車の安全・公害対策技術 (平成6年度)



It was a great experience to attend the course offered by JICA and my stay at the TBIC. I have really good memories — both professionally and personally.

My close contact with an extensive variety of technical subjects and experiments, my visits to plants and proving grounds of cars and truck manufacturers, have strongly contributed to enhance my technical knowledge and professional background.

Additionally, on the human side, I had the opportunity to know better the Japanese culture, customs and traditions. I will always have in my mind the friendship and politeness of the

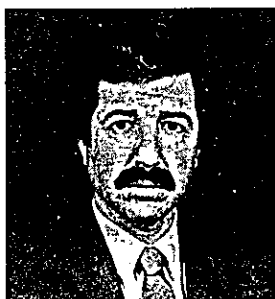
people from JICA, TBIC and JARI.

I hope someday to go back to Japan with my family and visit all the beautiful places I have been during my stay in Japan.

Memories of the Training in Japan and TBIC

Rüçhan YILMAZ, Turkey

地震工学セミナー（昭和58年度・平成6年度）



As being one of the JICA ex-participants, I have given this opportunity to point out my memories on the training in Tsukuba and TBIC after a decade of my first but basic training in seismology in IISEE (International Institute of Seismology and Earthquake Engineering). I have been pleased to indicate some of my memories here.

Having landed in Japan I felt somewhat timidity for being on the other side of the globe compared to Türkiye in a different culture in spite of my deep desire for being trained. But I found myself in a warm hospitality and fruitful orientation. Conditions in TBIC having various facilities for comfortable living and studying and training in IISEE were very well arranged by JICA. These surroundings made me to get used to living in Japan in a very short time period. I still remember how I participated in different social activities by my friends such as trying to speak in Japanese, walking and cycling around TBIC, playing soccer and badminton, etc.. The festivals arranged in different prefectures having interesting parades and folk dances, and the friendship parties serving various performances and foods have especially

mentioned here as having deep traces in my mind. One of the very important parts of my life in Tsukuba was going to the shopping especially during the weekend by bicycle provided by TBIC. This was not only for shopping purposes but also a kind of curing my homesickness.

I would like to point out that the lectures given by outstanding researchers and observations, in one sense, had forced me to study regularly. Besides, I had chance to know a number of researchers from different countries. I have still in connection with some of them.

私のみたニッポン

JICA通信

● 2 ●



アンシエロ・サントス

ハレタ 一九六七年、マニラ市で生まれる。マニラ市立大卒。フィリピン科学技術庁の工業技術開発研究所に勤を履き、九四年八月、国際協力事業団(JICA)の化学技術研究コース研修員として来日。

私は現在、つくば市の工業技術院物質工学系技術研究所で研修生活を返っています。研修テーマは油桐工業への高圧技術の利用です。油桐工業はわが国の重要な産業であり、豊富な資源を利用して様々な製品に役立てるために非常に有益な研究だと思っています。つくばは気候が温暖で、みなさん親切ですから、カルチャーショックをそれほど感じず、毎日楽しく研究活動を行っています。

均一な生活水準が印象的

アンシエロ・サントス
ハレタ (フィリピン)

私は現在、つくば市の工業技術院物質工学系技術研究所で研修生活を返っています。研修テーマは油桐工業への高圧技術の利用です。油桐工業はわが国の重要な産業であり、豊富な資源を利用して様々な製品に役立てるために非常に有益な研究だと思っています。つくばは気候が温暖で、みなさん親切ですから、カルチャーショックをそれほど感じず、毎日楽しく研究活動を行っています。

日曜日には毎週教会に行き、牧師の説教を聞き、教会の催しのために募金に協力します。結婚はクリスマス前、同じく帰国した友人と結婚しました。

日本では、幣働されています。車道と歩道が区別され、高い地位にある人でも一般の人々と生活水準にそれほど差があるように思われます。

日本は地盤沈下の多い国であるという情報は、米口



つくばフェスティバルの国際交流フェアでダンスを楽しむ観客

つくば市内の道路はよく整備されています。マニラの道路は車道と歩道の区別がないところが多く、公団の数も非常に少ないように感じます。

以前から耳にしていた、阪神大震災は、壊れた建物の数と多くの負傷者と死者、災害地域の広さとそのダメージの大きさを、近世の日本の最も大きな惨害の一つだと思えます。政府は不測の事態のために、その救済活動も遅い対応となってしまうのでは、と心配しています。

私のみたニッポン

● 3 ●

私は中米のコスタリカの人には、ニュースやテレビによる知識でなく、真面目に三百万の小さな国、人口は約五百万、農業は観光をベースで、工業は製造業が中心です。コスタリカは山岳地帯で、人口は約五百万、農業は観光をベースで、工業は製造業が中心です。

発展の陰に努力と謙虚さ

ハジヤルド・ホセ・セルヴァモラ

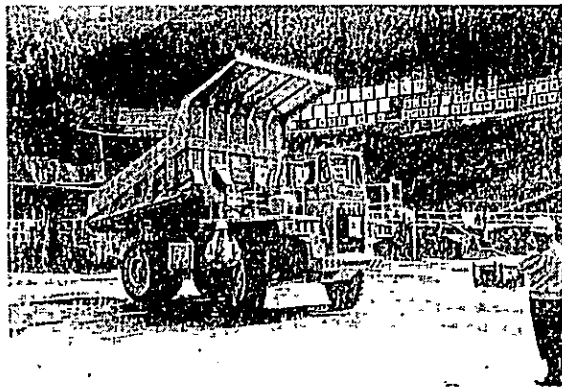
私は中米のコスタリカの人には、ニュースやテレビによる知識でなく、真面目に三百万の小さな国、人口は約五百万、農業は観光をベースで、工業は製造業が中心です。



ハジヤルド・ホセ・セルヴァモラ

一九六八年、サン・ホセ市生まれのコスタリカ人、コスタリカ国軍・電力公社で土木技師を務めている。九四年九月、国際協力事業団の研修員として来日、九年七月に帰国。

約十一カ月間滞在し、日本人や日本人の生活環境に接してみると、私が考へていたのは未だの日本ではなかったと分かりました。東京や名古屋、その他の都市で知られる高層ビルから、高度な養殖と生産技術はすぐに分かります。



埼玉県秩父市の浦山ダム建設工事現場を見学する筆者

この謙虚さ、そして可能、人々にいたるまで共通するもので、日本人の特質と習性、さらに向いしように努力する姿勢、大会社の重役から農業に置きしているか。個人的には、われわれ発展途上国にとって二つの大切な教訓があると思えます。自然資源を使って農業技術と経済面での発展を遂げることが可能ですが、未来の世代のためには、それらの自然資源を破壊することなく、残していかなければなりません。もう一つの教訓は、努力と謙虚さがあれば、われわれが目指すゴールに、今は到達することを想像もできないようなゴールにさえも、到達することが可能だということです。私はこれが発展の本質の秘訣だと思えます。(毎月第4土曜日掲載)

茨城新聞(平成7年8月26日)より

資料編

I センター概要

1. 施設・設備

(1) 建物の規模

- ①敷地面積 20,403.97㎡
- ②建築面積 3,567.99㎡
- ③延床面積 10,221.58㎡
- ④構造 管理棟 鉄筋コンクリート3階建
宿泊棟 鉄筋コンクリート5階建
エネルギーセンター 鉄筋コンクリート2階建
体育館 鉄筋コンクリート一部鉄骨造り

(2) 主要施設

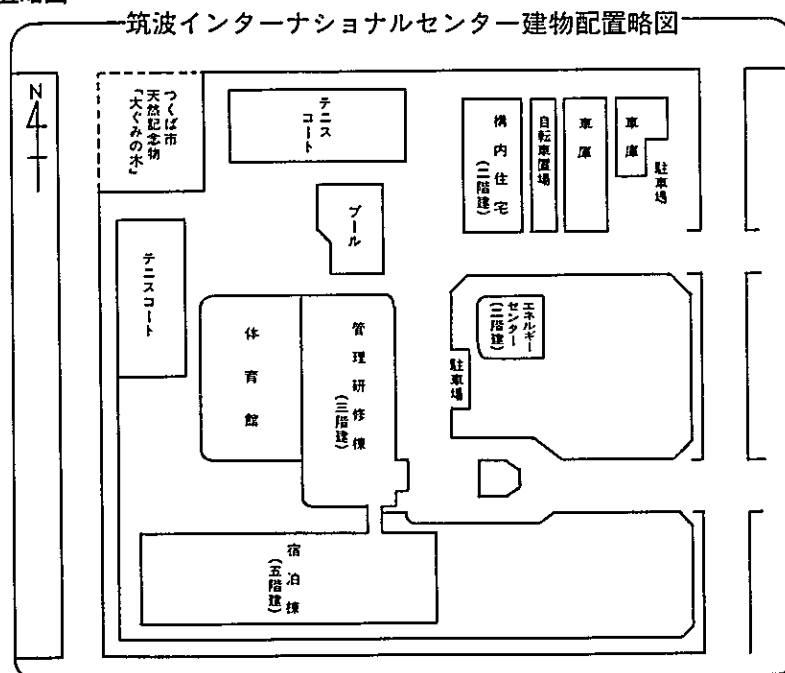
- ①宿泊棟 宿泊人員 200名
 - a. シングルルーム (15.262㎡ バス、トイレ、電話、テレビ付き) 190室
 - b. ツインルーム (30.524㎡ バス、トイレ、電話、テレビ付き) 5室
 - c. ドクタールーム 1室
 - d. 談話室 1室
- ②管理・研修棟
 - 〈研修施設〉
 - a. セミナールーム (視聴覚室、コンピュータ・ルームを含む) 8室
 - b. 日本語講師室 1室
 - c. 会議室 2室
 - d. 研修監理員室 2室
 - 〈管理施設〉
 - a. 事務室 1室
 - b. 所長室 (応接室を含む) 1室
 - c. その他
フロント、ロビー、ラウンジ、食堂、ミュージックルーム、撞球室等
- ③体育館
 - 〈競技のできる種目〉
バスケットボール、バレーボール、バドミントン、卓球
- ④付属施設
 - テニスコート 2面
 - スイミングプール

(3) 用地取得状況

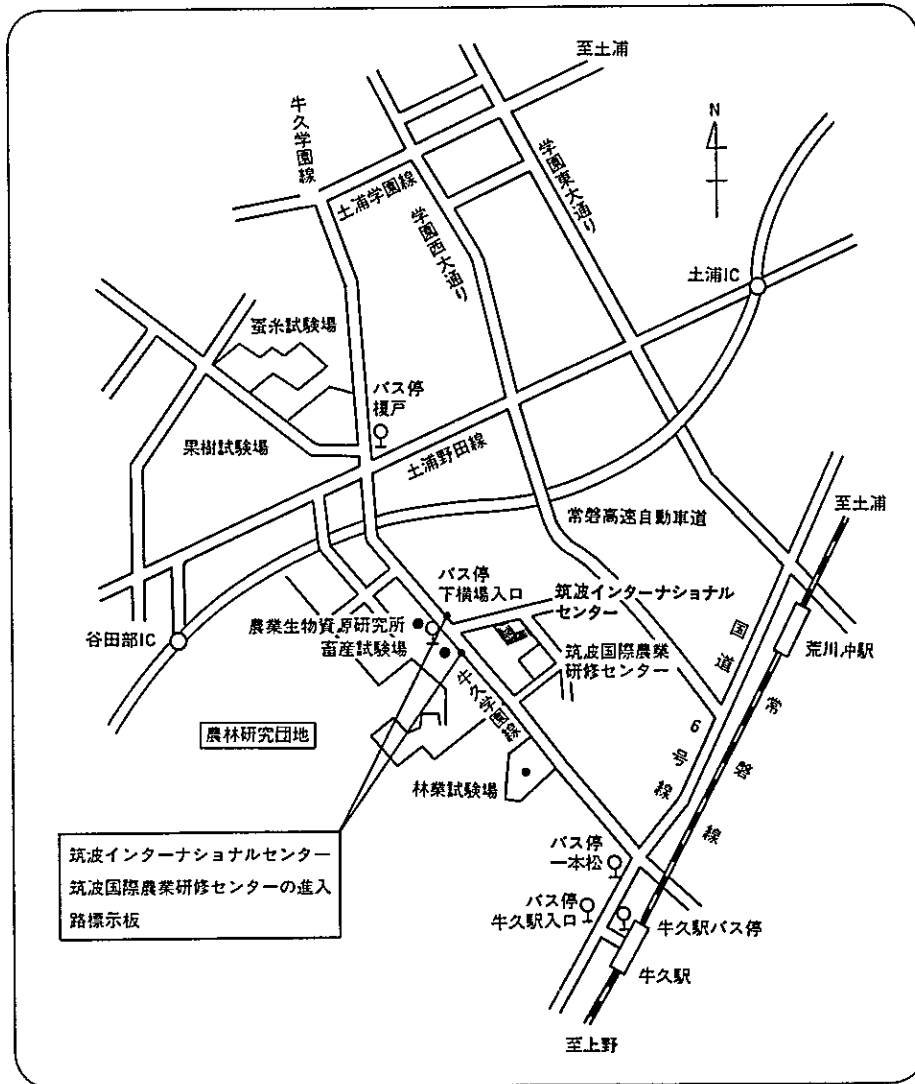
(所有地20,403.95㎡)

年 月 日	番 地	面 積	区 分
平成3年4月1日	高野台3丁目6番2	14,259.11㎡	借 地
	〃 〃 6番3	6,144.86㎡	〃
	合 計	20,403.97㎡	
平成4年3月17日	高野台3丁目6番2	5,925.77㎡	借 地
	〃 〃 6番3	6,144.86㎡	〃
	小 計	12,070.63㎡	
	高野台3丁目6番4	8,333.33㎡	譲 渡
合 計	20,403.96㎡		
平成4年12月17日	高野台3丁目6番2	5,925.77㎡	譲 渡
	〃 〃 6番5	1,935.82㎡	〃
	小 計	7,861.59㎡	
	高野台3丁目6番4	8,333.33㎡	所 有 地
	〃 〃 6番3	4,209.03㎡	借 地
合 計	20,403.95㎡		
平成5年12月7日	高野台3丁目6番2	5,925.77㎡	所 有
	〃 〃 6番5	1,935.82㎡	〃
	〃 〃 6番4	8,333.33㎡	〃
	小 計	16,194.92㎡	
	高野台3丁目6番3	4,209.03㎡	譲 渡
合 計	20,403.95㎡		

(4) 建物配置略図



(5) 筑波インターナショナルセンター付近略図



2. 組織・定員

(1) 筑波インターナショナルセンター（予算定員）

所長		1名
総務課	課長	1名
	課長代理	1名
	職員	7名
	小計	10名
研修課	課長	1名
	課長代理	1名
	職員	4名
	小計	6名

	合計	16名
JICEよりの派遣職員		3名
(2) その他の協力機関		
①財団法人国際協力センター (JICE)		
支所長		1名
職員		1名
嘱託		2名
研修監理員		24名
日本語常勤指導員		1名
開発部嘱託 (TBIC出向)		3名
	合計	32名
②東京ビジネスサービス㈱		
筑波支店長		1名
総括主任		1名
エネルギーセンター		9名
フロント		11名
清掃		19名
守衛		9名
食堂		15名
管理室		1名
	合計	66名 (内24名はパート)
③大新東㈱		
運転手		3名

※なお、協力機関の人数は平成7年7月1日現在である。

科 目	年 度					
	昭和 54	55	56	57	58	59
(支出の部)	1,821,231	419,893	683,309	596,353	557,250	597,272
管理費	16,754	109,335	158,081	128,392	73,870	63,300
(項) 業務管理諸費	16,754	109,335	153,517	127,892	68,470	55,785
(事5) 業務運営に必要な経費						86
(事6) 一般業務経費						86
(事7) 管理経費						86
(目) 庁費						86
(事6) 広報に必要な経費						
(目) 広報諸費						
(事5) 附属機関及び国内支部に必要な経費	16,754	109,335	153,517	127,892	68,470	55,699
(事6) 附属機関に必要な経費	16,754	109,335	153,517	127,892	68,470	55,699
(事7) 国際研修センター業務経費	16,754	109,335	153,517	127,892	68,470	55,699
(目) 庁費	5,885	12,294	27,128	6,641	12,234	7,497
(目) 国内研修施設勘定へ繰入	10,869	97,041	126,389	121,251	56,236	48,202
(項) 施設費			4,564	500	5,400	7,515
(事5) 附属機関及び国内支部に必要な経費			4,564	500	5,400	7,515
(事6) 附属機関に必要な経費			4,564	500	5,400	7,515
(事7) 国際研修センター業務経費			4,564	500	5,400	7,515
(目) 施設費			4,564	500	5,400	7,515
出資金等施設整備費	1,787,617	3,000	54,830			
(項) 出資金等施設整備費	1,787,617	3,000	54,830			
(目) 施設費	1,787,617	3,000	54,830			
(収入の部)	11,984	166,798	254,671	250,097	224,945	225,883
(款) 施設利用収入	1,104	67,554	126,048	127,723	167,154	176,742
(項) 施設利用収入	1,104	67,554	126,048	127,723	167,154	176,742
(目) 施設利用収入	1,104	67,554	126,048	127,723	167,154	176,742
(款) 運営補助収入	10,869	97,041	126,390	121,251	56,236	48,201
(項) 運営補助収入	10,869	97,041	126,390	121,251	56,236	48,201
(目) 運営補助収入	10,869	97,041	126,390	121,251	56,236	48,201
(款) 雑収入	11	2,203	2,233	1,123	1,555	940
(項) 雑収入	11	2,203	2,233	1,123	1,555	940
(目) 雑収入	11	2,203	2,233	1,123	1,555	940

(単位：千円)

60	61	62	63	平成 元	2	3	4	5	6
801,385	827,256	875,984	1,038,339	985,140	1,043,248	1,173,766	1,180,463	1,148,641	1,208,853
82,046	60,409	30,603	45,085	20,480	37,157	58,875	55,707	43,558	44,086
72,546	45,485	18,122	18,713	13,350	27,062	55,171	39,303	31,257	32,628
		70	98	98	105	105	662	2,250	1,481
		70	98	98	105	105	662	2,050	1,281
		70	98	98	105	105	662	2,050	1,281
		70	98	98	105	105	662	2,050	1,281
								200	200
								200	200
72,546	45,485	18,052	18,615	13,252	26,957	55,066	38,641	29,007	31,147
72,546	45,485	18,052	18,615	13,252	26,957	55,066	38,641	29,007	31,147
72,546	45,485	18,052	18,615	13,252	26,957	55,066	38,641	29,007	31,147
20,392	10,417	18,052	16,280	13,252	19,073	55,066	38,641	29,007	31,147
52,154	35,068		2,335		7,884				
9,500	14,924	12,481	26,372	7,130	10,095	3,704	16,404	12,301	11,458
9,500	14,924	12,481	26,372	7,130	10,095	3,704	16,404	12,301	11,458
9,500	14,924	12,481	26,372	7,130	10,095	3,704	16,404	12,301	11,458
9,500	14,924	12,481	26,372	7,130	10,095	3,704	16,404	12,301	11,458
9,500	14,924	12,481	26,372	7,130	10,095	3,704	16,404	12,301	11,458
			73,500			89,913		21,878	80,290
			73,500			89,913		21,878	80,290
			73,500			89,913		21,878	80,290
232,973	218,151	216,754	210,828	210,195	219,246	226,480	243,544	251,949	248,624
179,794	182,627	216,440	208,089	209,689	210,633	225,806	243,291	251,777	248,469
179,794	182,627	216,440	208,089	209,689	210,633	225,806	243,291	251,777	248,469
179,794	182,627	216,440	208,089	209,689	210,633	225,806	243,291	251,777	248,469
52,154	35,068		2,335		7,884				
52,154	35,068		2,335		7,884				
52,154	35,068		2,335		7,884				
1,025	456	314	404	506	729	674	253	172	155
1,025	456	314	404	506	729	674	253	172	155
1,025	456	314	404	506	729	674	253	172	155

4. 職員の変遷

年度 配置部署	昭和55 (昭和55年7月)	昭和56 (昭和56年8月)	昭和57 (昭和57年8月)	昭和58 (昭和58年8月)
所長	八坂 傳郎	八坂 傳郎	松崎 孝雄	松崎 孝雄
総務課 課長	戸井田 宣雄	前田 忠夫	前田 忠夫	前田 忠夫
課長代理	三島 哲郎 長山 瑞穂 小菅 博	三島 哲郎 長山 瑞穂 小菅 博	三島 哲郎 山口 功 長山 瑞穂	三島 哲郎 山口 功 長山 瑞穂
	上久保 順三 富田 みゆき 宮本 幸子	上久保 順三 菊地 文夫 富田 みゆき	石井 正克 小菅 博 宮本 みゆき	小菅 博 宮本 みゆき 宮本 幸子
	鈴木 晃(兼) 篠塚 征和(兼)	宮本 幸子 鈴木 晃(兼)	宮本 幸子 鈴木 晃(兼)	鈴木 晃(兼)
研修課 課長	橋本 明彦	橋本 明彦	橋本 明彦	倉持 寛子
課長代理	鈴木 晃 遠藤 哲也 新垣 和成 篠塚 征和	鈴木 晃 遠藤 哲也 新垣 和成 篠塚 征和	鈴木 晃 下河原 孝 遠藤 哲也 篠塚 征和 桜井 英充	鈴木 晃 下河原 孝 遠藤 哲也 篠塚 征和 石井 正克
年度 配置部署	昭和59 (昭和59年8月)	昭和60 (昭和60年8月)	昭和61 (昭和61年8月)	昭和62 (昭和62年8月)
所長	松崎 孝雄	松崎 孝雄	大畑 英雄	大畑 英雄
総務課 課長	前田 忠夫	脇田 博	吉田 芳夫	大類 弘幸
課長代理	三島 哲郎 小野 雄平 鈴木 晃(兼) 長山 瑞穂 小菅 博 宮本 みゆき 宮本 幸子	三島 哲郎 小野 雄平 鈴木 晃(兼) 梅田 薫 長山 瑞穂 小菅 博 宮本 幸子	三島 哲郎 小野 雄平 梅田 薫 長山 瑞穂 小菅 博 宮本 幸子	三島 哲郎 小野 雄平 梅田 薫 長山 瑞穂 山田 智子 小菅 博
研修課 課長	倉持 寛子	倉持 寛子	倉持 寛子	高杉 重光
課長代理	鈴木 晃 下河原 孝 遠藤 哲也 篠塚 征和 石井 正克	鈴木 晃 下河原 孝 西川 昭司 遠藤 哲也 石井 正克 安藤 新	橋本 東一 下河原 孝 西川 昭司 村山 秀樹 服部 一平	橋本 東一 下河原 孝 西川 昭司 服部 一平 本村 洋

年 度 配置部署	昭和63 (昭和63年8月)	平成元 (平成元年8月)	平成2 (平成2年8月)	平成3 (平成3年8月)
所 長	小澤大二	武井秀雄	武井秀雄	江崎政久
総務課 課長	大類弘幸	大類弘幸	大類弘幸	大類弘幸
課長代理	佐藤忠生 小野雄平 梅田 薫 長山瑞穂 山田智子 小菅 博	佐藤忠生 小野雄平 梅田 薫 長山瑞穂 山田智子 小菅 博	佐藤忠生 小野雄平 小島 明 長山瑞穂 栗原 勉 山田智子 小菅 博	佐藤忠生 小野雄平 小島 明 山田智子 小菅 博 今野誠一 中野 勉
研修課 課長	高杉重光	高杉重光	和田欽次郎	和田欽次郎
課長代理	橋本東一 下河原 孝 恵原裕樹 村山秀樹 服部一平	能代 裕 恵原裕樹 宮川文男 村山秀樹 栗原 勉	能代 裕 恵原裕樹 村山秀樹 村田俊一 米山芳春	能代 裕 村山秀樹 村田俊一 塩野広司 米山芳春
年 度 配置部署	平成4 (平成4年8月)	平成5 (平成5年8月)	平成6 (平成6年8月)	平成7 (平成7年8月)
所 長	江崎政久	飯村圭二	森本 勝	森本 勝
総務課 課長	沢地 真	沢地 真	河合恒二	河合恒二
課長代理	小野雄平 小島 明 山田智子 関 芳夫 小菅 博 今野誠一 中野 勉	徳嵩 孝 高村俊輔 小島 明 山田智子 関 芳夫 小菅 博 石井隆悦 今野誠一 今野 祐子	徳嵩 孝 高村俊輔 小島 明 山田智子 関 芳夫 小菅 博 安保 進 今野誠一	大久保宏明 高村俊輔 小島 明 山田智子 関 芳夫 小菅 博 千葉誠二 高山勝景
研修課 課長	海老名 捷彦	喜多村 裕介	喜多村 裕介	三澤 吉孝
課長代理	能代 裕 長山瑞穂 村山秀樹 村田俊一 塩野広司 米山芳春	永井 南 長山瑞穂 榎本好孝 吉田ひとみ 森 口加奈子	永井 南 長山瑞穂 吉田ひとみ 永石雅史 土屋友里恵	永井 南 長山瑞穂 吉田ひとみ 永石雅史 土屋友里恵 鈴木昭彦

5. 年表

平成7年8月30日

年 月 日	事 項
昭和36年5月	アジア協会茨城国際農業研修会館開設
昭和37年6月30日	「海外技術協力事業団」(OTCA)の設立
昭和38年9月10日	筑波地区に研究学園都市建設を閣議了解
昭和40年4月20日	日本青年海外協力隊事務局設置
昭和42年9月5日	筑波研究学園都市に移転を予定する機関等を閣議了解
昭和43年10月16日	科学技術庁防災科学技術センター起工式(移転第1号)
昭和45年5月19日	筑波研究学園都市建設法制定
昭和45年6月	アジア協会茨城国際農業研修会館を内原国際農業研修センターに改称
昭和45年10月23日	筑波新大学建設事務所(新治郡桜町)開所
昭和48年4月16日	「研究学園都市移転機関等の移転計画の概要」の決定(研究学園都市建設推進本部)
昭和48年10月	筑波大学設置法成立
昭和49年6月26日	「国土庁」発足
昭和49年8月1日	「国際協力事業団」(JICA)の設立
昭和52年3月29日	筑波インターナショナルセンターおよび筑波国際農業研修センター敷地配分決定
昭和53年12月	筑波インターナショナルセンター建設開始
昭和54年度	個別コースについてはJICA本部よりの便宜供与として5名を受け入れた。
昭和54年7月1日	筑波インターナショナルセンター設立準備室を本部に設置
昭和55年3月10日	筑波インターナショナルセンター(TBIC)開所
昭和55年3月10日	八坂 傳郎初代所長就任
昭和55年3月15日	地震工学コース22名および地震工学セミナー10名の計32名の入館(TICより移動および新規来日)
昭和55年度	集団コースについては、家畜衛生研究コース他9コースの97名受入れ、個別コースについては、新規33名の受入れを実施
昭和55年4月23日	筑波インターナショナルセンター開所式の開催
昭和55年5月1日	家畜衛生研究コースの開始
昭和55年5月17日	大相撲夏場所観戦
昭和55年11月28日	国際親善パーティーの開催(以後毎年この時期に実施)
昭和56年1月10日	計量標準コースの巡回指導チームの派遣(18日間)
昭和56年3月	筑波国際農業研修センター関係研修員51名の入所
昭和56年度	集団コースについては、新規開設3コースおよびJICA本部よりの移管1コースが増え、計13コースの149名受入れ、個別コースについては、新規83名、その他TIATC関係研修員106名
昭和56年度	第1回集団コース担当者連絡会の開催
昭和56年4月1日	筑波国際農業研修センター(TIATC)開所
昭和56年4月13日	インドネシア国研修員Mr. Soehardi心筋梗塞により死亡(4月1日のみの宿泊予定であった)
昭和56年5月	嘱託医制度の導入
昭和56年9月7日	研修実施機関関係者に対する英語研修の開始(以後毎年実施)
昭和57年1月15日	松崎 孝雄所長(第2代)就任
昭和57年度	集団コースについては、新規開設1コース、再開1コースを含む計14コース151名(地震工学セミナーは隔年実施のため休止)、個別コースについては新規67名、

年 月 日	事 項
昭和57年 5 月31日	その他TIATC関係研修員124名
昭和57年 5 月26日	第1回消防訓練 (以後毎年実施)
昭和57年 7 月 1日	プールオープン (8月31日まで、以後夏に毎年オープン)
昭和57年 9 月27日	帰国研修員巡回指導派遣 (地震工学コース20日間)
昭和58年 3 月21日	帰国研修員巡回指導派遣 (測量技術コース15日間)
昭和58年度	集団コースについては、新規開設2コースおよび再開コース1コース計17コース199名、個別コースについては新規75名、その他TIATC関係研修員152名
昭和58年 5 月12日	集団研修コース担当者連絡会
昭和58年 6 月 8日	第1回研修員へのコンピュータ講座 (初級、中級) 開始 (以後毎年実施)
昭和58年 6 月17日	第1回研修員への文化講座 (58年度計10回実施、以後毎年数回実施)
昭和58年11月23日	帰国研修員巡回指導派遣 (家畜衛生コース15日間)
昭和59年度	集団コースについては、今年度実施を開始する16コース計180名、個別コースについては新規90名、その他TIATC関係研修員162名
昭和59年 5 月24日	集団研修コース担当者連絡会
昭和59年 8 月10日	第1回地域研究会 (研修員による自国紹介および民俗芸能等紹介) の実施 (本年度は今回を含む4回実施、以後毎年実施)
昭和59年 8 月14日	第1回研修員への科学講座 (本年度計5回実施)
昭和59年 9 月	設立後初めて宿泊室不足になり館外宿泊を実施
昭和60年 3 月17日	国際科学技術博覧会 (EXPO'85) 開催
昭和60年度	集団コースについては、今年度実施を開始する16コース計178名、個別コースについては新規94名、その他TIATC関係研修員176名
昭和60年 5 月30日	集団研修コース担当者連絡会
昭和60年 9 月16日	国際科学技術博覧会 (EXPO'85) 閉幕
昭和61年度	集団コースについては、今年度実施を開始する15コース計157名、個別コースについては新規81名、その他TIATC関係研修員178名
昭和61年 4 月 1日	大畑 英雄所長 (第3代) 就任
昭和61年 8 月 4日	帰国研修員巡回指導班派遣 (鉦山保安コース15日間)
昭和61年10月27日	集団研修コース担当者連絡会
昭和62年度	集団コースについては、今年度実施を開始する16コース計189名、個別コースについては新規76名
昭和62年 7 月17日	集団研修コース担当者連絡会
昭和62年 7 月20日	帰国研修員巡回指導班派遣 (植物遺伝資源コース22日間)
昭和62年 9 月18日	帰国研修員巡回指導班派遣 (公開技術セミナー) (地震工学・地震工学セミナー19日間)
昭和62年11月18日	帰国研修員巡回指導班派遣 (繊維高分子コース15日間)
昭和62年11月30日	つくば市発足
昭和63年 3 月15日	小澤 大二所長 (第4代) 就任
昭和63年度	集団コースについては、新規開設2コースを含む今年度実施を開始する18コース計211名、個別コースについては新規67名
昭和63年 7 月28日	集団研修コース担当者連絡会
昭和63年11月 1日	武井 秀雄所長 (第5代) 就任
平成元年 1 月23日	帰国研修員巡回指導班派遣 (計量標準コース18日間)

年 月 日	事 項
平成元年 2月20日 平成元年度	帰国研修員巡回指導班派遣（沿岸鉱物資源探査コース20日間） 集団コースについては、今年度実施を開始する16コース計157名、個別コースについては新規84名
平成元年11月24日 平成2年度	帰国研修員巡回指導班派遣（公開技術）（消化管病理学コース21日間） 集団コースについては、今年度実施を開始する15コース計157名、個別コースについては新規80名
平成2年 4月9日 平成2年 8月27日 平成3年 3月1日 平成3年度	帰国研修員巡回指導班派遣（化学技術研究コース15日間） 帰国研修員巡回指導班派遣（公開技術）（防災技術コース22日間） 江崎 政久所長（第6代）就任 集団コースについては、今年度実施を開始する17コース計147名、個別コースについては新規84名
平成3年 9月14日 平成4年度	帰国研修員巡回指導班派遣（林業林産研究コース12日間） 集団コースについては、今年度実施を開始する17コース計140名、個別コースについては新規100名
平成4年 7月22日 平成4年12月1日 平成5年度	帰国研修員巡回指導班派遣（石炭鉱山保安コース20日間） 飯村 圭司所長（第7代）就任 集団コースについては、今年度実施を開始する15コース計122名、個別コースについては新規109名
平成5年10月11日 平成6年 2月25日 平成6年度	帰国研修員巡回指導班派遣（地震工学コース12日間） 茨城県国際交流協会との共催によるNGOフォーラム開催 集団コースについては、今年度実施を開始する17コース計141名、個別コースについては新規108名
平成6年 4月1日 平成6年 8月30日 平成7年 1月15日 平成7年 1月18日 平成7年 8月 および9月 平成7年11月10日	森本 勝所長（第8代）就任 帰国研修員巡回指導班派遣（化学技術コース11日間） 帰国研修員巡回指導班派遣（公開技術・河川及びダム工学コース16日間） 関係NGO団体との国際協力に関する懇談会 茨城県との国際協力に関するワークショップ開催 TBIC15周年記念誌刊行

II 事業実績

1. 年度別・国別研修員受入実績表

〈アジア 2,741人〉

年度別 国別・地域別	昭和 54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成 元	2	3	4	5	6	計	
バンクランジェ		10	9	10	3	2	9	8	5	7	6	8	7	7	9	8	108	
ブリスベン		1	1	2			1			2	1			2			10	
ブルネイ							1	2	3			2		1		1	10	
ミャンマー		10	11	10	20	17	9	10	13	5		1	4	3	2	9	124	
カンボジア												1	1	2	2	23	29	
中国		1	13	13	23	21	23	26	23	25	13	31	20	29	29	39	329	
香港		1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	2		1	1	1	17	
インド	3	4	7	7	4	5	5	3	5	8	7	3	8	6	6	9	90	
インドネシア	4	16	37	43	39	38	34	22	25	25	27	20	20	16	13	30	409	
大韓民国		9	6	9	15	8	16	10	16	13	15	4	14	9	18	14	176	
ラオス										2			2		1	1	6	
マレーシア		9	7	15	17	17	12	12	17	19	23	12	21	19	9	19	228	
モルディブ				1		1		1					1				4	
モンゴリア										1		1		3		2	7	
ネパール	1	8	10	11	7	7	8	9	7	4	5	8	7	2	6	12	112	
パキスタン	1	8	9	1	4	5	9	10	8	8	8	4	8	7	7	19	116	
フィリピン	2	12	25	27	25	29	29	25	33	23	34	20	14	19	29	46	392	
シンガポール		1	1		2	1	1					1	1	3	3		14	
スリランカ		5	4	5	4	5	8	5	5	8	9	5	6	8	11	18	106	
台湾							2										2	
タイ	1	15	32	25	24	36	25	25	24	31	30	38	31	32	31	37	437	
ウイエトナム		1			1				4						2	3	4	15

〈中近東 510人〉

年度別 国別・地域別	昭和 54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成 元	2	3	4	5	6	計
アルゼンチン					1			1	2	3	1	2	2	2	1	2	17
バングラデシュ				1									1		1		3
インド	2	5	6	13	15	10	15	10	10	12	12	12	11	9	10	15	167
イラン	1	4	2		1	6	6	3	3	10	9	7	5	5	5	6	73
イラク		2	5		4	4	5	5	5	1	1	3					35
シリア		1	1		1				1	2	1	1	1	1	1	2	13
モロッコ								2		1		1	1	2		2	9
オマーン									1							1	2
カタール								1									1
サウジアラビア		2	1		2	2	2			1		2	1	1		3	17
スウェーデン		1	5	3	4	2	5	2	3	4	3	1	2				35
イスラエル		2		2	2		1	2	1	2	2	3	2	1	5	1	26
アラブ首長国連邦							1		2	2		3	3	1		1	13
ドバイ	2	3	6	4	2	5	9	7	7	7	5	6	10	4	6	13	96

国別・地域別	年度別	昭和54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5	6	計
イニエーション																	1	1
アラブ首長国連邦																	2	2

<アフリカ 588人>

国別・地域別	年度別	昭和54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5	6	計
ベネナ											1				2			3
ボソフナ							1											1
ブルキナファソ										1						1	1	3
ブルンチ											1	1	1					3
カメルーン						1	1				1		1		1		1	6
中央アフリカ									1	1								2
チャド										1		1						2
エチオピア	1	3	2	1	4	2	2	2	1	4	3	1	3	2	3	4	4	40
ガボン		3	1	1							1							6
ガンビア									1									1
ガナ			1	2	3	3	3	3	1	2	2	2		4	2	3	3	31
ギニア			2	1			2		1		3	2	2	1	1	1	1	17
ギニアビサウ						1			1			1			1	1		5
象牙海岸						2	1			1	2	3	2	2	2	5	4	24
ケニア		2	5	3	4	4	6	5	4	9	8	6	7	14	10	17		104
リベリア		4	4	2	1	1	1	1	1		2	2						18
マダガスカル				1	2	1	1	1	1		3	3	1		1	2	2	19
マラウイ				1	1	1					1	1	1		2	2	2	12
マリ				1	2	2		4	4	3	5	2		1		2		26
モーリシアス								1	1			1						3
ニジェール											3	1	1	1	2	2	4	14
ナイジェリア		2			4	3		2	1	1	1	3	3	2	3	1		26
ルワンダ											1	1						2
セネガル										1	1	1		2		4	1	10
セイシエル													1				1	2
シエラレオネ					1	1	1	1			3	1		2			1	11
スワジランド									1			1					1	3
タンザニア		6	6	2	7	8	9	9	9	6	9	8	9	8	8	6	10	111
トゴ					1						1					1		3
ザンビア				1		2	1	1		1	1	3	1	1		1	1	14
ザンビア							1		3		3	2	1	1	3	4	3	21
ジンバブエ					1	1	1				1	1		1			2	8
モーリタニア														1				1
ウルグワンダ														1			1	2
南アフリカ														4	8	7	13	32
赤道ギニア																	1	1
レソト																	1	1

<中南米 1,252人>

国別・地域別	年度別	昭和54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5	6	計
アルゼンティン		3		2	5	11	7	10	3	3	8	4	8	10	6	5	8	93
ボリビア		1	1	3	1	6	7	5	2	5	5	2	4	4	2		4	52

国別・地域別	年度別	昭和54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5	6	計
フランス	シベリ		5	17	13	14	22	20	25	17	22	22	13	18	15	15	17	255
チリ			3	3	4	5	7	5	3	4	2	3	7	8	7	5	15	81
コロンビア		1		1	1	3	3	3	4	4	5	5	7	5	7	6	8	63
コスタリカ		1		2		5	1			1	1	1	2	2		1	1	18
キューバ			1		1		1	1		2	1	2			1	2	2	14
ドミニカ(共)				3	2	3	5	2	3	2	2	2	3	3	1	2	8	41
エクアドル		2	1	2	1	1	3	3	1	1	4	3	2		2		2	28
エルサルバドル				1	1	1	1	2		2	2	1		2		2	1	16
グレナダ													1					1
グアテマラ			1	1	1			2	3		2	1	1		2	2		16
ガイアナ									1									1
ホンジュラス					2	1		1	1	2			1	3	2	3	3	19
ジャマイカ				1	1	1			1									4
メキシコ		1	2	6	12	11	11	9	14	9	11	2	7	13	9	12	13	142
ニカラグア								1	1	2	1	2	2	3	3	1	1	17
パナマ				1	1	1	2	2	1	2		2	2	1		1	4	20
パラグアイ			4	2	5	5	8	7	5	8	4	5	3	3	12	13	21	105
ペルー		5	6	9	6	19	12	9	13	20	10	11	13	15	20	12	12	192
セント・ビンセント													1			1	1	3
トリニダード・トバゴ											1	2	1	1				5
ウルグアイ			1		1				2	2	5	5	5	2	3		1	27
ヴェネズエラ				2	3	4	2	1	2	2	4	3	2	2	3	2	4	36
オランダ														1				1
ドミニカ																1		1
スリナム																	1	1

〈オセアニア 92人〉

国別・地域別	年度別	昭和54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5	6	計
フィジー				4	4	3	1	3	3	3	2	5	4	2	1	1		36
ミクロネシア											1	1			1		1	4
バブアニューギニア				2	1	3	3	1	3	5	3	3	4	3	7	2	2	42
ソロモン諸島									1						1		1	3
西サモア			1					1	1			1	1	1				6
バヌアツ																	1	1

〈ヨーロッパ 44人〉

国別・地域別	年度別	昭和54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5	6	計
アイルランド													1	2	2			5
ギリシャ							2	1	1	2	2	1		1	2		1	13
ポルトガル													1	1				2
ユーゴスラヴィア					2		4	5	1	1	2		3					18
マールタ														1				1
ルーマニア															1		1	2
ブルガリア																1	2	3

年度別合計	32	177	287	295	352	355	363	326	351	384	352	333	354	360	355	551	5,227
-------	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------

※筑波国際農業研修センターが受け入れて筑波国際センターに泊った研修員を含む。

2. 年度別コース一覧表 (集団)

コース名	年度	昭和 55	56	57	58	59	60	61	62	63
地震工学II										
地震工学セミナー		休		休		休		休		
家畜衛生研究										
沿海鉱物資源探査										
計量標準										
測量技術II										
地下水資源開発										*
洪水防御										
防災科学技術										
電気電子計測標準										
河川及びダム工学II										
建築技術										
石炭鉱山保安										
物質工学研究										*
林業林産研究										
植物遺伝資源										
消化器癌病理学										
生命工学研究										
放射線科学基礎研究										
測量新技術セミナー										
産業公害防止										
産業技術研究										
自動車の安全・公害対策技術										
放射線安全管理実務者										
獣医バイオ診断技術										
森林研究										
土木技術研究開発幹部セミナー										
法定計量										
環境地図セミナー										
湖沼環境保全セミナー										

平成 元	2	3	4	5	6	7	備考
※							平成元年度からフェーズII
	休			休		休	隔年コース
※			休				平成2年度からフェーズII
※							平成2年度からフェーズII
							昭和63年度のみ「地下水資源開発セミナー」コースとして実施
				※			平成4年度まで「防災技術セミナー」
							昭和59年度まで「河川工学」コース 平成5年度からフェーズII
							昭和60年度から大阪国際研修センターへ移管
※							平成元年度まで「鉱山保安」コース
			※			※	昭和60年度まで「機軸工学」コース 平成3年度まで「繊維・高分子」コース 平成6年度まで「高分子研究」コース
							昭和56年度までの5年間は移転に伴い休止した
				休			平成6年度からTIATCへ移管
							平成2年度まで消化管病理学 平成4年度からTIC(H)へ移管
							平成6年度まで「化学技術研究」コース
							平成2年度「モータリゼーションセミナー」 平成3～4年度「モータリゼーション」コース
							平成7年度のみコース